

平成30年度

# 研究紀要



甲府市立善誘館小学校

## はじめに

私たちの社会は、進展するグローバル化や人工知能（AI）の飛躍的な進化などにより加速度的に変化し、ますます将来の予測が難しい時代を迎えております。そのような流れの中においても、学校教育は、伝統や文化に立脚した広い視野を持って行われ、子どもたち一人ひとりに志を高く持ち未来を創り出していくために必要な資質・能力を育むことが求められております。

そのような中、平成29年3月、次期学習指導要領が告示され、目指すポイントとして、社会で働く知識や力を育むために、子どもたちが「何を学ぶのか」という視点に加えて、「どのように学ぶか」という学びの過程に着目してその質を高めることが重視されており、その鍵となるのが、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」をいかに実現するかという学習指導の改善が示されました。また、従来の「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として新たに教科として位置づけられるとともに、小学校中学年に週1時間の「外国語活動」、高学年に週2時間の「外国語科」が新設されます。これらは戦後教育における大きな転換点とも言え、教員各自の力量の向上を図るべく、英知を結集して研修・研究に努めていく必要があります。

さて、本校では、前年度の成果と課題を踏まえ、「思いやる心をもつ子 よく考え工夫する子 元気でたくましい子」の学校教育目標の具現化を目指し、研究テーマを「学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成」、副題を「主体性を育む言語活動の充実と家庭学習の工夫を通して」とし、理論研究と授業研究を中心に研究と実践を重ねてきました。研究を具体的に進める組織としては、奇数学年ブロック・偶数学年ブロック・サポートブロックの三部会に分かれ研究を進め、一定の成果と今後への具体策を見出すことができました。また、家庭学習の定着や日常的な言語活動の推進についてもさらなる充実と発展を図るため、家庭学習については、児童の発達段階を考慮した系統的な内容を教職員で共通理解を図り、保護者の皆様に学習内容・時間のめやす・家庭学習カード及び自学ノートの作成等について説明するとともに、中学校の授業や自学ノートへの取り組みを紹介し、理解と協力を得て取り組んできました。さらに、日常的な言語活動の推進のため、ユニバーサルデザイン化も継承し、教室環境、学習環境、ノート指導等、日々の実践の中に活かしながら、子供たちの実態に合わせて指導を続けてきました。これらの取組の様子と成果や課題を本研究紀要にまとめることができました。拙い研究ではありますが、御高覧をいただければ幸いです。

本校の研究は、生きる力を育むことを目指しながら、あるべき授業の根幹にふれる実践的な研究だと考えます。この研究が真に子供たちに反映されるためには、研究の成果を日々の実践につなげるという視点を常にもっていなければならないということだと考えます。そして、教師が、子供たち一人一人を伸ばしていく高い指導力を身につけることを今後も継続して取り組んでいくことが大切だと考えます。

結びに、本校の研究・実践について多大な御指導・御支援を賜りました山梨県総合教育センター 指導主事 飯沼久裕 先生、同じく指導主事 河西絵美先生、甲府市教育委員会学力向上専門員 高橋義美 先生には、心より感謝し御礼申し上げます。また、関わった同人の努力と熱意に賞賛と感謝を申し上げます。

校長 柏木 精一

# 【目次】

〔はじめに〕	(1)
〔目次〕	(2)
〔研究の概要〕	(3～8)
〔実践の記録〕	
奇数学年ブロックの研究について	(9)
1, 3, 5年生	(10～18)
奇数学年ブロックの研究のまとめ	(19)
偶数学年ブロックの研究について	(20)
2, 4, 6年生	(21～34)
偶数学年ブロックの研究のまとめ	(35)
やまなみ	(36～38)
スマイル	(39, 40)
ことばと発達のサポートルーム	(41～46)
〔研究のまとめ〕	
アンケートの分析	(47～53)
〔あとがき〕	(54)

\* ( ) ページ数

## 1 研究主題

# 学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成

～主体性を育む言語活動の充実と家庭学習の工夫を通して～

### 《主題設定の理由》

#### (1) 教育の今日的課題から

様々な課題が社会全体に混在しているこの日本で、それらの課題を国民全体で解決していくために、子供たちに「確かな学力」を身につけさせることは学校にとって大変重要な責務である。児童一人一人が、変化が激しく予測の難しい社会を生き抜くためには、社会や個人のあらゆる問題について、様々な知識や経験を生かして自ら考え、判断し、表現して解決していくことが大切になる。また、世界のグローバル化が急速に進んでいる国際社会の現状を考えると、今後ますます日本人として自分の意見を異文化の人々に伝えることは重要になってくる。

さらに、学習指導要領では、「確かな学力」に加えて、学習の基盤となる言語の能力を育成するために言語活動を充実させること、家庭との連携を図りながら児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならないことが示されている。

現代社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域の活動の基盤となる「知識基盤社会」の時代である。そこで、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、それらを活用して課題を解決するために必要な「思考力」・「判断力」・「表現力」等を育む必要がある。その重要な手立てが「言語活動の充実」である。言語活動の充実を支える「話す・聞く・書く・読む力」を基礎・基本として育てていくことは、本研究の根幹と言える。

#### (2) 学校教育目標の具現化から

- |                |
|----------------|
| 校訓 「善行・勤勉・体育」  |
| ○ 思いやる心をもつ子（徳） |
| ○ 良く考え工夫する子（知） |
| ○ 元気でたくましい子（体） |

「生きる力」の構成要素は、「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」である。これを受けて本校の教育目標も、知・徳・体のバランスのとれた人間形成を目指しており、「生きる力」の理念につながる願いが込められている。これまで、自ら学び、豊かな心を持ち、たくましく行動する児童の育成のために教育活動を進めてきた。

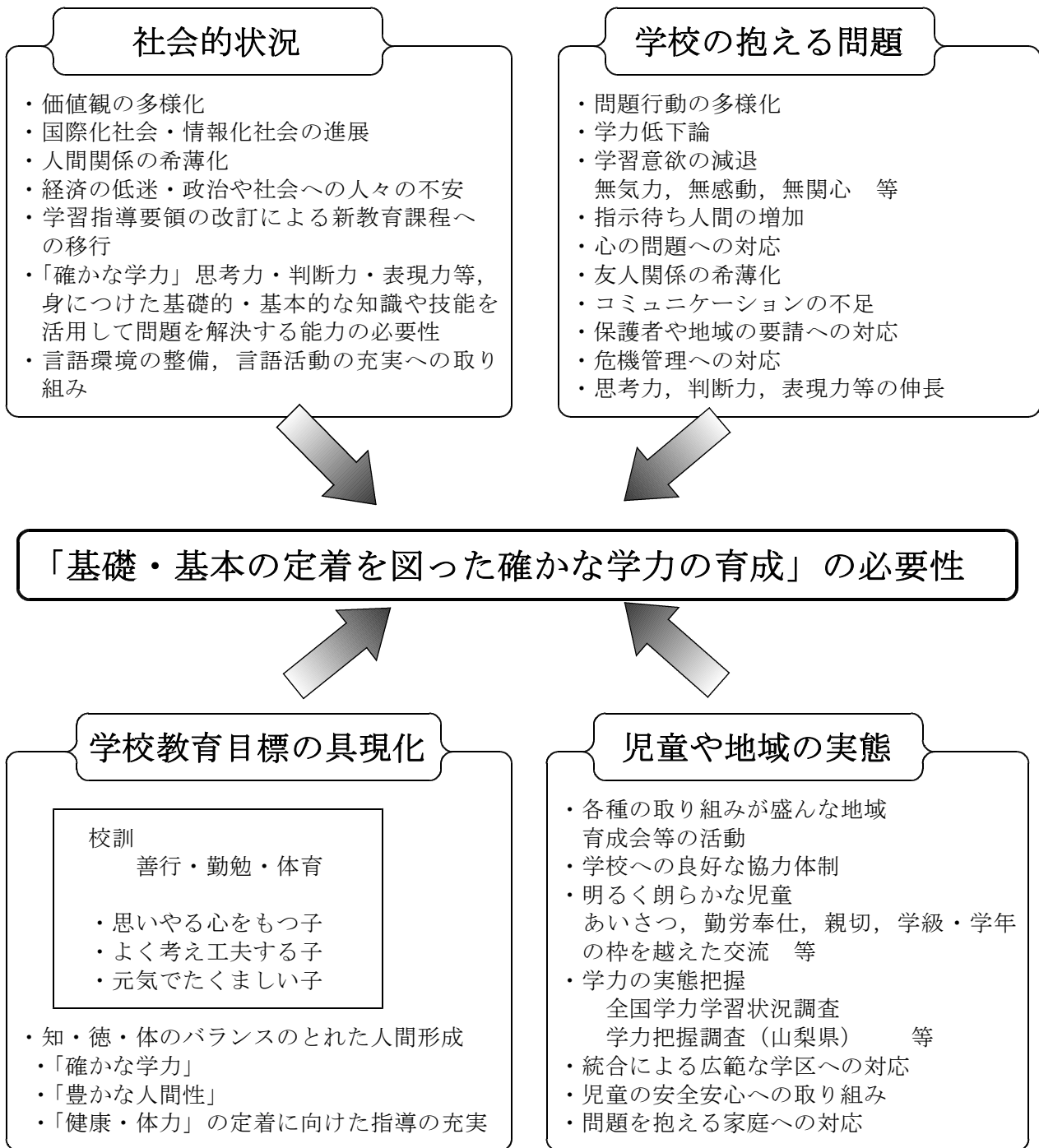
さらに、「確かな学力」の定着に向け、学校経営方針の重点の中でも、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着と言語活動の活性化や学習意欲の向上、学習習慣の確立が示されている。本研究を通して、児童の思考力・判断力・表現力等を育成し、「確かな学力」の向上を図ることは、本校の教育目標の具現化につながるものである。

#### (3) 児童の実態・課題から

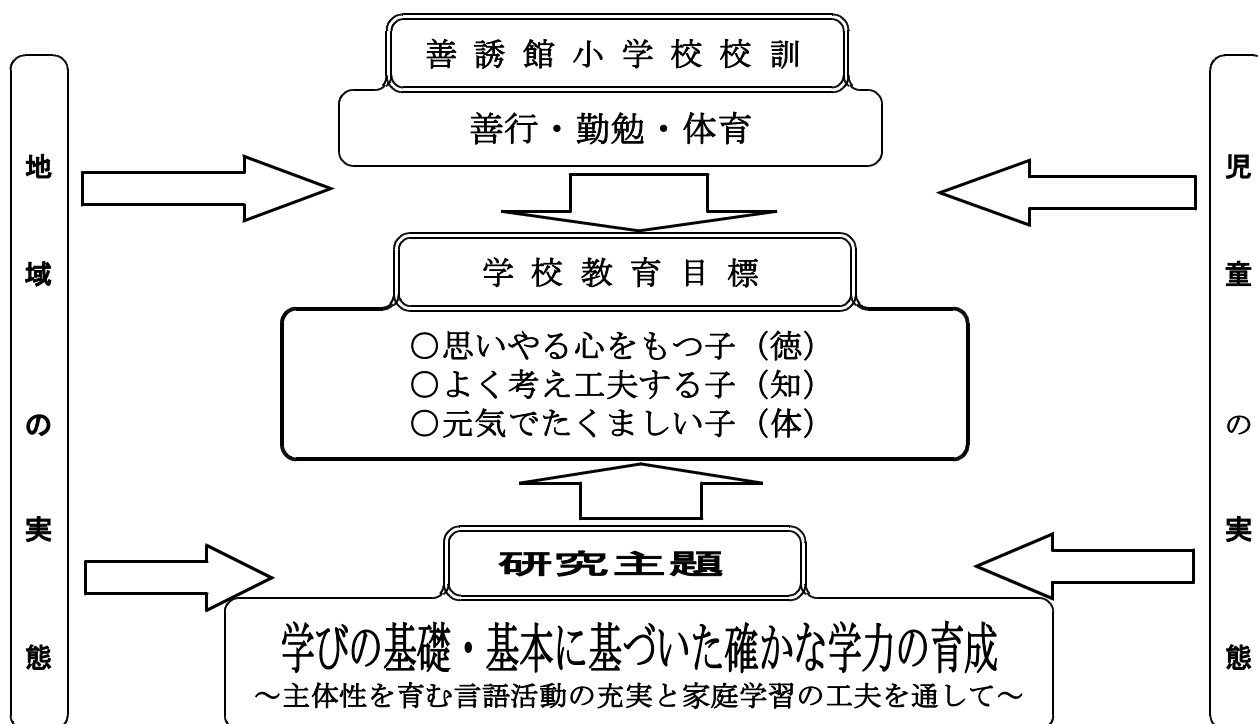
全国学力・学習状況調査や県学力把握調査、学校評価、昨年度までの校内研究の振り返りから、本校児童の課題点として、次のような点が挙げられる。

- ・学習意欲・理解に個人差が大きい。
- ・筋道を立てて考えたり、理由や根拠を示して説明したりする力が弱い。
- ・学習面・生活面ともに、特別な支援を必要とする児童がいる。
- ・家庭学習の習慣について、内容や質に個人差がある。
- ・少人数であるがゆえ、多くを語らなくても相手が思いをくみ取ってくれるため、互いの思いを伝え合う力が乏しい。

以上のような実態を踏まえ、児童に確かな学力を身に付けさせ、自己を表現できる児童を育成するために、「言語活動の充実」の話す・聞く・書く・読む力を育てることが重要である。また、学習習慣の定着に個人差がある問題を踏まえて、家庭との連携を深めながら、家庭学習を工夫し、授業と有機的に結び付けるような指導方法を研究していく必要がある。



## 2 研究の基本的な考え方 《学校経営の重点と校内研究》



### 研究主題について

- (1) 「基礎・基本の定着」とは  
 一口に言えば、「生きて働く力のもとを身に付けること」  
 ○基礎…あらゆるものの土台になる力  
 前学年の知識・技能，これまでに培ってきた学び方や表現力など  
 ○基本…基礎の上に作り上げていく力  
 現学年の知識・技能，学び方，思考力など  
 ○基礎・基本…学習を成立させる基本的な学力で，繰り返し学習することにより身に付き，次の学習に繰り返して生かせるもの  
 「読む」「書く」「聞く」「話す」「計算する」「調べる」「まとめる」などの力。また，生活習慣，考え方，学び方。  
 ○定着…学習で学んだ内容が「書ける」「話せる」「操作できる」など，他者からも客観的に見て分かるように表現できる状態にまで高めること，生活の中で生きて働く力として「応用できる」「適用できる」状態ととらえる。
- (2) 「確かな学力」とは  
 基礎的な知識や技能はもちろんのこと，これに加えて学ぶ意欲や知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力などを含めた力である。
- (3) 「主体性を育む」とは  
 本校児童の課題としてあげられた「根拠のある意見を書く児童がなかなか育っていない」ことについては，学力状況調査においても本校の課題として指摘されている。そこで，国語科だけではなく，日常の授業及び生活指導から論理的思考力を育むための教師のかかわり方や取り組みについて共通理解のもと研究していく必要がある。そこで，子供の主体性を育むといっても子供任せにするのではなく，子供一人一人の状況に応じて，子供の主体性を尊重することと，教師が指導性を発揮することをバランスよく行うことが重要である。つまり，「主体性を育む」とは，「子供が自ら課題をみつけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する力を育てていく」ということである。

(4) 「言語活動の充実」とは

人間関係が希薄になっている現代、子供たちが将来にわたって、人とよりよく関わる力、自分の思いを伝える力、つまりコミュニケーションする能力を向上させていく必要があると考える。具体的には、以下のような力をしっかり身に付けることが必要であると考え。

- ・話す力
  - ①語彙を豊かにして、表現力を育むこと。
  - ②自分の思いや考えを伝えようとするとともに、相手の思いや考えを理解し尊重できるようにすること。
- ・聞く力
  - ①自分の思いや考えの違いを整理しつつ、相手の話を聞き、受け止めることができるようにすること。
  - ②相手の話に対して、状況に応じて的確に反応できるようにする。
- ・書く力
  - ①客観的な根拠や理由に基づいて、自分の考えや意見を書くことができる。
  - ②自分の気持ちなどを正確に相手に伝えられるように書くことができる。
- ・読む力
  - ①文章の構成や論理の展開に沿って、内容を読み取ることができる。
  - ②さまざまな描写をとらえ、内容を的確に理解できる。

(5) 「家庭学習の工夫」とは

子供たちが学習意欲を持ち、学習習慣を定着していくためには、学校での主体的に学ぶ学習活動の工夫や学習規律の確立とともに、家庭との連携を図った家庭学習の充実に取り組む必要がある。本校ではこれまで「家庭学習の手引き」を活用し、家庭と連携しながら家庭学習の習慣化を図ってきた。

今年度は、効果的な家庭学習の推進に努めていくとともに、昨年度の課題としてあげられた「家庭学習に対する個人差の問題」を解決するための手立てとして、どのような方法が適切かを児童の実態を把握すると共に、その個人差に対応した方法について研究していくということである。

以上のように研究主題をとらえ、「確かな学力」を育成するために、各教科において、「言語活動の充実」話す・聞く・書く・読む力等を育てる取り組みを工夫しながら行う。

### 3 研究目標

各教科の学習において、学習の基礎・基本である「話す・聞く・書く・読む」力等を育てる工夫に取り組むことにより、学習意欲が高まり「確かな学力」が育まれていくことを実践を通して明らかにしていく。

### 4 研究の内容

#### ユニバーサルデザインを取り入れた授業

どの子供にも「確かな学力」を育成するために、ユニバーサルデザインを生かした授業を取り入れる。具体的には、教材、学習内容、板書等を視覚的に捉えやすくすること（視覚化）、学習のめあてや内容を子供たちがわかりやすいように明確にすること（焦点化）、互いの考えをみんなで伝え合い共有できるようにすること（共有化）をユニバーサルデザインの授業を構成する基本的な視点として意図的に取り入れる。

また、指導をより確実にするために、次のような工夫も取り入れていく。

#### ①授業研究

##### ○学習過程の工夫

つかむ（問題把握） → 考える（自力解決） → 深める（学び合い） → 広げる

##### ○課題設定の工夫

児童がイメージしやすい課題、興味・関心のある課題、わかりやすい課題 など

- 教材・教具の工夫  
具体物，半具体物，ICT活用，学習掲示物，ワークシート など
- 思考・表現の型の活用  
学び合うための話し方・聞き方，考え方の表し方，発言の仕方の話型 など
- 学習形態の工夫  
全体，小グループ，ペア，個 など
- 学習評価の工夫  
自己評価，相互評価 など
- 学年・学級経営の工夫  
各学級での日常的な取り組みや**家庭学習の充実** など
- 家庭との連携  
家庭学習の習慣化（学年×10分＋10分以上） など  
家庭学習カード
- ②教育環境の整備
  - ユニバーサルデザインを取り入れた教室・校内掲示の整備  
学力向上に資する掲示物（写真やイラストの活用）
  - 読書活動の推進  
週2回のさわやか朝の読書，読み聞かせの充実
  - 朝学習の充実  
週1回の朝学習の計画立案（基礎・基本の定着）

## 5 研究の方法

### （1）理論研究の推進

- ① QUテストまたは，ユニバーサルデザインについての理論研究
- ② QUテストの実施（5月・11月）。（児童の「確かな学力」の向上に役立てる。）
- ③ 全国学力・学習状況調査や県学力把握調査の結果を分析し，課題点を明確にして，学力向上に関する改善策を検討する。

### （2）授業研究の実施

- ① 各学年で研究授業を行い，各学年の実態に応じた手だてを工夫し言語活動の充実を検証する。
- ② 研究授業は全校参加タイプ（A：低学年ブロック）とブロック内タイプ（B）を設定する。
- ③ 研究実践は全員が行う。（一学級一実践）
- ④ 授業研究による成果と課題を話し合う。

### （3）言語環境を整えるための日常的な活動の推進

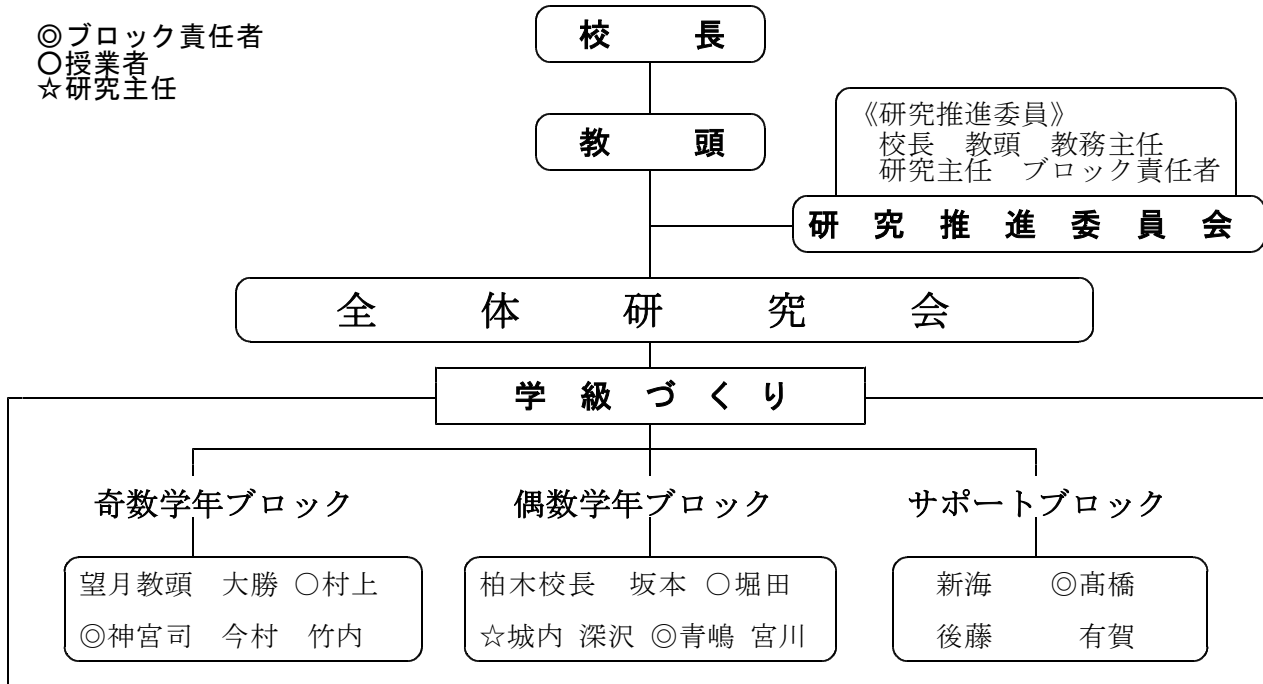
- ① 読書活動の推進  
（ア）読み聞かせ （イ）図書館の利用 （ウ）市立図書館との連携 等
- ② 日常活動における取り組みの推進  
（ア）スピーチ （イ）音読，群読 （ウ）百人一首 （エ）掲示物の工夫，新聞の活用 等

### （4）研究の概要，実践事例，研究の成果等をまとめた研究紀要の作成



## 6 研究組織

◎ブロック責任者  
○授業者  
☆研究主任



\* 推進委員会…主に原案作成，ブロック間の調整，学力調査等の児童の実態把握等を担当する。

## 平成30年度 校内研究会 研究計画

月	日	曜	回	内 容
6	18	月	第3回	◇家庭学習について情報交換 ◇ブロックごと 理論研究と研究授業について（日時・内容など）
7			第4回	◇外国語活動で使用する教材作成作業及び演習
8			第5回	◇教育課程研究協議会環流報告 ◇ことば教室研究の概要報告 ◇各学年 HP 更新 ◇ブロックごとに理論研究と授業案の作成
9	3	月	第6回	◇ブロックごとに研究と授業案の検討
10	22	月	第7回	◇研究授業と研究討議（指導主事の要請） or 全体での指導案検討
11	19	火	第8回	◇研究授業と研究討議（指導主事の要請）
12	12	水	第9回	◇研究結果の検証と考察
1	21	月	第10回	◇研究のまとめ（成果と課題についての考察）
2	18	月	第11回	◇本年度の研究の反省と次年度の方向性について

\* 第7回・8回の研究授業については，日程など弾力的に考えていく。

## 奇数学年ブロックの研究について

### 1 研究授業について

3年生の児童の多くが、理科の学習に対して興味・関心を持ち、特に観察・実験による問題解決を好む傾向がある。一方で、今年度の「学力把握調査」では、理由を記入したり、順序立てて説明することを苦手としている児童が見られる。そのため、理科の授業の中でも根拠に基づいて推論をしたり、実験結果から事象について類推したりすることに重点を置いて取り組んでいく。

授業は、「気づき」→「問題（課題）を見い出す」→「予想・仮説の設定」→「検証計画の立案」→「観察・実験の実施」→「結果の整理」→「考察や結論の導き出し」の流れで行っていく。

また、理科だけでなく、論理的思考力を育むため、児童の思考過程を大切にし、他の人にわかりやすく伝える能力や意欲を育てていきたい。

### 2 主体性をはぐくむ言語活動の充実について

昨年度の「全国学力・学習状況調査」の結果からも、本校児童の課題点として、筋道を立てて考えたり、理由や根拠を示して説明したりする力が弱い傾向にある。基礎的な力に加えて自らの考えを表現し、説明することができるように、次の点に重点を置いて指導にあたりたい。

#### ・「話す力」

②自分の思いや考えを伝えようとするとともに、相手の思いや考えを理解し、尊重できるようにすること。

#### ・「聞く力」

①自分の思いや考えの違いを整理しつつ、相手の話を聞き、受け止めることができるようにすること。

#### ・「書く力」

①客観的な根拠や理由に基づいて、自分の考えや意見を書くことができるようにすること。

#### ・「読む力」

②様々な描写を捉え、内容を的確に理解できるようにすること。

### 3 家庭学習の工夫

昨年度の課題としてあげられた、「家庭学習に対する個人差」を解決するための手立てとして次のような取り組みを行っている。

・授業の中で学んだことと家庭学習が結びつくように、教師側が授業につながるおすすめの家庭学習を児童に伝える。

・下校前に、その日の家庭学習の内容を書かせ、授業の復習や苦手な教科などに取りかかりやすくさせる。

・提出された家庭学習ノートは、担任がチェックをし、手本としたい学習内容を、教室に掲示したり、学年だより等で紹介したりし、他の児童に参考にさせたり家庭への啓発を行ったりしていく。

・定期的に、児童間でノートを見合い、感想を伝えたり、自分の学習の参考にさせたりさせる。

**1 単元（題材）名**

ひきざん

**2 単元（題材）の目標**

1 11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算の仕方を理解し、確実にできるようにするとともに、それを用いることができるようにする。

**3 単元（題材）について**

第1学年では、数の意味と表し方について、「いくつといくつ」において、1つの数を合成や分解により構成的にみることを学習してきた。また、「10よりおおきいかず」において、「+いくつ」を「10といくつ」ととらえる学習をしてきた。このような見方は、繰り下がりのある減法の計算の仕方を考える際の素地としても重要な内容である。減法計算は、これまで繰り下がりのない場合を扱ってきた。また、「たしざん」では繰り上がりのある加法を指導したが、本単元ではその逆の減法について指導する。繰り上がりのある加法においても、子供たちは繰り返しの練習を重ねてきたが、答えをすぐに出すまでは時間のかかる子もいた。繰り下がりのある計算は初出であり、次学年以降の減法の筆算の基礎となるもので、1学年の大変重要な内容であるので、確実に理解できるように指導していきたい。

本単元では、まず減加法の手順を丁寧に扱い、十分に理解させて習熟させた上で、もうひとつの方法として減々法があることを理解させ、その後の計算練習では、どちらの方法で計算するのがよいかを見童自身に考えさせるようにしている。計算の仕方を考える際には、算数ブロックなどの半具体物や図などを用いて考えたり、それらを使って言葉で説明したりまとめたりする活動を重視していきたい。さらに、日常生活の中様々な場面を設定し、どんな場面に引き算がが用いられるかを考えさせ、引き算の必要性を知らせ、繰り返し指導していきたい。

**4 本校の校内研究とのかかわり**

本単元においては、自分の考えを式や図を使って表現し、相手に伝えることができる力の育成に重点を置く。そのためには、日常からノート指導に取り組んでいる。「考える場所」としてのノート作りをしていけるよう取り組んできた。学習感想を書かせ、効果的なコメントなどを書き入れ、子供たちの意欲づけにつなげてきた。また、自分の考えを相手に伝えようとするとともに、相手の考えを聞き、理解し尊重したり自分の考えと比べたりすることができるようになるために、日常的な取り組みも大切にしたい。「聞き方名人・話し方名人」等を確認した聞き方や話し方の指導、朝のお話タイム等の言語環境づくり、意見の出しやすいう学級の雰囲気づくり等にも取り組んでいる。

ユニバーサルデザインに関わって、活動や学習に主体的に取り組めるようにするために、教室環境の工夫や情報伝達の工夫等に取り組んでいる。

**5 単元全体の評価規準**

- 「関心・意欲・態度」
- ・既習の減法計算や数の構成を基に、11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算の仕方を考えようとしている。
- 「思考・判断・表現」
- ・11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算の仕方を考え、操作や言葉などを用いて表現したり工夫したりすることができる。
- 「知識・理解」及び「技能」
- ・10のまとまりに着目することで、11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算ができる。

**6 指導計画** 総時数 12時間

第1次(5時間)

- ① 13-9の計算の仕方(減加法)を考えること
- ② 減数が9の場合の計算の仕方(減加法)
- ③ 減数が8の場合の計算の仕方(減加法)
- ④ 減数が9, 8の場合の計算練習
- ⑤ 減数が7の場合の計算の仕方(減加法)

第2次(2時間)

- ① 12-3の計算の仕方(減々法)を考えること
- ② 繰り下がり計算練習, 文章題の解決

第3次(5時間)

- ①～⑤計算カードを用いた減法生産の練習

第4次(1時間)

- ① 学習内容の理解(しあげ)

**7 ユニバーサルデザインに関わって**

- ・学習のめあてを明確にし、本時にすることをしっかり理解させ、見通しを持って取り

- 組み、振り返りができるようにする。
- ・ブロックの操作をしながら計算の仕方を考え、互いの考えを伝い会えるようにする。
  - ・日常的に、「話し方名人・聞き方名人」を掲示し、意識させたり、「朝のお話タイム」等、言語環境作りに取り組んでいる。

## 8 本時の学習

(1)日時 平成30年11月9日(金) 2校時

(2)場所 1年1組教室

(3)本時の目標 繰り下がりのあるひき算について、ブロックを操作しながら計算の仕方を考えることができる。

### (4)本時の学習活動

経過	学習活動と内容	支援・指導上の留意点	言語活動におけるのぞましい子どもの姿
導入 10分	1.前時の復習をする。 12-7の計算の仕方をブロックでやってみよう。 ・2から7はひけない。 ・12を10と2にわけ。 ・10から7をひいて3。 ・3と2で5。 2.本時の問題をとらえ、解決への見通しを持つ。 おかしが12こあります。 3こたべると、のこりはなんこですか。 12-3の計算の仕方を考えましょう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブロックの操作をさせながら、計算の仕方を思い出させる。</li> <li>・12-7と12-3を比べ、共通点や相違点を意識させ、前時を基にすれば解決できそうだという見通しをもたせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計算の仕方を言いながら、ブロックの操作をしている。</li> <li>・前時までとどこが違うのか考えている。</li> </ul>
展開 25分	3.12-3の計算の仕方を考える。 ・12-3はどうやったらいいか考え、友だちに伝えられるようにしましょう。 4.12-3の計算の仕方を説明し合う。 どのようにして答えを出したのか伝え合おう。 ・12-7と同じやり方。 ・3を2と1に分け、2から2をひいて、10から1をひくやり方。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間巡視をし、できない子には前時を思い出させる。</li> <li>・できた子には、他のやり方がないか考えさせる。</li> <li>・ひく数が小さいので、どんなやり方がやりやすいか考えさせる。</li> <li>・自分のやり方を発表させる。</li> <li>・他の児童には、自分の考えと同じところや分かりやすいところがないか考えながら聞かせる。</li> <li>・他のやり方が出なかったらお菓子の絵に戻って考えさせる。</li> <li>・やりやすい方法はどの方法か気づかせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時を思い出しながら、ブロックを操作し、計算の仕方を考えている。</li> <li>・他のやり方を考えている。</li> <li>・自分の考えをみんなに伝えていく。</li> <li>・友だちの考えを自分と比べている。</li> </ul>
まとめ 10分	5.12-3の計算の仕方をまとめる。 ・2つの方法があるので、自分のやりやすいやり方で計算してよいことを知らせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2つのやり方を比べ、どちらがやりやすいか考えさせる。</li> <li>・理解が難しい子には、今までのやり方でよいことを知らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・違うやり方もあることを知り、本時の学習について、感想を書いている。</li> </ul>

(5)評価 繰り下がりのあるひき算について、ブロックを操作しながら計算の仕方を考えることができたか。

## 9 成果と課題

- ・一人一人の児童が、前時までの学習を基にして、12-3の計算の仕方をノートに式や図を使って書くことができた。
- ・2から3が引けないため、10から3を引いている(減加法)児童が多かったが、先に、12の2を取り、10から残りの1を取る方法(減減法)を考えている児童もいた。できた児童には、他のやり方もないかと声をかけると意欲的にたくさんのやり方を考えている姿が見られた。
- ・考えを発表する時には、たくさんの児童が手を上げることができた。前に出て教師用のブロックを使い、分のやり方を声に出しながら説明することができた。
- ・学習感想には、友だちのやり方を褒める言葉や、自分の考え方を出した方法等もあり、みんなの前で発表して交流し合うことができた。
- ・よい考えを書いていても自信を持って発表することができない児童もいるので、学級の雰囲気作りや自信を持たせる場面等を考えていきたい。

### 3 学年 理科学習指導案

指導者 村上 聡

#### 1 単元名

「明かりをつけよう」

#### 2 単元の目標

〈自然事象への関心・意欲・態度〉

- ・乾電池に豆電球をつなぐと点灯したり，しなかつたりすることに気付き，点灯させるにはどのようにつなげばよいか調べようとする。
- ・回路に物を入れると，物によって豆電球が点灯したり，しなかつたりすることから，回路にいろいろな物をつないで物の性質を調べようとする。

〈科学的な思考・表現〉

- ・豆電球が点灯するときとしないときとを比較して，回路内を電気が流れることによって点灯し，点灯しないときは電気が流れていないと考え，表現することができる。
- ・豆電球が点灯する回路の一部にいろいろな物を入れることにより，電気を通す物と通さない物に分類することができる。

〈観察・実験の技能〉

- ・乾電池と豆電球を使って点灯する回路をつくることができる。
- ・回路の一部にいろいろな物を入れ，豆電球が点灯するときとしないときとの違いを調べ，記録することができる。

〈自然事象についての知識・理解〉

- ・電気を通すつなぎ方と通さないつなぎ方があることを理解することができる。
- ・電気を通す物と通さない物があることを理解することができる。

#### 3 単元について

(1) 教材観

この単元は「エネルギー」についての基本的概念を学習する内容であり，第4学年の「A(3)電流の働き」の学習につながるものである。児童は，乾電池と豆電球などのつなぎ方と乾電池につないだ物の様子に着目して，電気を通すときと通さないときとのつなぎ方を比較しながら，電気の回路について調べる活動を通して，それらについて理解を図り，観察，実験などに関する技能を身に付けるとともに，共通点や差異点を基に問題を見だし，問題解決をしていく。

本時では，回路の一部に身の回りにある物を入れたときの豆電球の様子に着目し，電気を通す物と通さない物を調べる。この活動を通して，電気の回路についての問題を見だし，表現し，物には電気を通す物と通さない物があることを捉えていく。

単元の系統性

エネルギーの見方		エネルギーの変換と保存		エネルギー資源の有効利用
<b>3年 風やゴムの働き</b> ・風の働き ・ゴムの働き	<b>3年 光の性質</b> ・光の反射・集光 ・光の当て方と明るさや温かさ	<b>3年 磁石の性質</b> ・磁石に引きつけられる物 ・異極と同極	<b>3年 電気の通り道</b> ・電気を通すつなぎ方 ・電気を通す物	
		<b>4年 電気の働き</b> ・乾電池の数とつなぎ方		
<b>5年 振り子の運動</b> ・振り子の運動		<b>5年 電気の働き</b> ・鉄心の磁化，極の変化 ・電磁石の強さ		
<b>6年 てこの規則性</b> ・てこのつり合いと重さ ・てこのつり合いと規則性 ・てこの利用		<b>6年 電気の利用</b> ・発電・蓄電 ・電気による発熱 ・光電池の働き ・電気の利用		

## (2) 児童観

これまでの植物や昆虫の観察の学習では、教師からの促しがなくても定規で大きさを測ったり、観察の対象を比較したりする姿が見られた。また学習内容に関して豊富に知識を備えた児童も在籍している。「太陽の動きを観察する実験」では、グループで観察・記録を行い、その結果を比較して話し合うことで問題解決を行っていくことができた。しかし、観察・実験から得られた結果を言葉で表現することに苦戦している児童も在籍しており、個人差が出始めている。

## (3) 指導観

児童の実態と本校の課題である「根拠を判った意見を書くことができる児童が少ない」を改善するために、「予想・考察・結論」の書き方の型を用意して指導している。その書き方を参考にして自分の言葉で、自分の考えをまとめることができる児童が増えてきている。本単元ではより一層の表現力の向上に努めたい。またグループや学級全体での言語活動を通して、確かな学力の育成に努めたい。

## 4 児童の実態

本単元の実施にあたり、本学級の児童に事前調査を行った。理科の学習が「とても好き」「好き」と答えた児童が22名(1名特別支援)中21名であった。その理由は「実験や観察が好きだから」「昆虫や植物が好きだから」「新しいことを知ることが楽しいから」と答えた児童が多く、理科の学習に関心の高い児童が多いと考えられる。後ろ向きの意見としては「危険な実験などもあると聞いたので、少し怖い」「テストの点が悪いことがあったから」という意見も見られた。

さらに、「『電気』は私たちの生活の中でどのようなところで使われていると思いますか」(複数回答可)という質問に対して、「テレビ」「エアコン・扇風機」「スマートフォンの充電」「家の明かり」と答える児童が多かった。日常生活において電気を使った様々な製品があることに気が付いていることがわかった。また少数意見として「AI」「IH」「シャワー」と答えた児童もいた。本単元で使用する豆電球を見たことがあると答えた児童は10名であった。「どこで見たことがあるか」という質問に対して、「ライト」「実験」「おもちゃ」「父親の仕事場」と答えた児童がいた。一方で「家の電気」と答えた児童が4人おり、電球との違いがわかっていない様子も見られた。また乾電池を使ったことがあると答えた児童は14名であった。「何に使ったか」(複数回答可)という質問に対しては「ライトをつけるために」が4名、「おもちゃ」が6名と、乾電池を日常的に利用している児童は少数であることがわかった。

## 5 本校の校内研究とのかかわり

本校校内研究主題は「学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成」である。その実現に向けて「主体性を育む言語活動の充実」と「家庭学習の工夫」という二つの側面から迫っていくことが副題として設定されている。そこで本単元では、以下のことを意識して指導にあたる。

- ・「自然の事物・現象に対する気づき→問題の見だし→予想・仮説の設定→検証計画の立案→観察・実験の実施→結果の整理→考察や結論の導き出し」の流れの授業展開。
- ・「予想・考察・結論」の書き方を指導する(語尾の違いなど)。
- ・自分と相手の意見の共通点と差異点を比較しながら、発表を行う。
- ・実験結果から読み取れる共通点から、自分の考えを相手に伝わりやすいように書く。
- ・家庭学習の工夫として、「学んだこと」に加え「豆電球に明かりがつくおもちゃを考えよう」というテーマを設定し、取り組ませる。

## 6 単元全体の評価規準

【自然事象への関心・意欲・態度】

- ・乾電池に豆電球をつないだり、回路に物を入れたりしたときの現象に興味・関心を持ち、進んで実験しようとしている。

【科学的な思考・表現】

- ・豆電球が点灯するときとしないときとを比較して、回路内を電気が流れることによって点灯し、点灯しないときは電気が流れていないと考え、表現している。
- ・豆電球が点灯する回路の一部にいろいろな物を入れることにより、電気を通す物と通さない物に分類している。

【観察・実験の技能】

- ・回路にいろいろな物を入れて、豆電球が点灯するときと点灯しないときとの違いを調べ、その過程や結果を記録している。

【自然事象についての知識・理解】

- ・電気を通すつなぎ方と、通さないつなぎ方があることを理解している。
- ・電気を通す物と通さない物があることを理解している。

7 指導計画（総時数 6 時間）

次	学習活動	指導上の留意点	評価基準と評価方法
第1次	① 明かりが暮らしの中で使われていることを話し合う。  ②③ 豆電球に明かりがつくつなぎ方を調べ、実験結果を発表し、豆電球の明かりがつくつなぎ方と回路についてまとめる。	① 日々の生活の中で電気が用いられている物を想起させ、明かりに対する興味・関心を高める。また危険が伴う実験であることを伝え、正しく実験器具を使うことを指導する。 ②③ 豆電球が点灯するつなぎ方と点灯しないつなぎ方を比較させ、明かりがつくつなぎ方の共通点を見つけさせ、まとめさせる。	【関】生活体験や、教科書の写真などから、豆電球に明かりがつくことに興味を持ち、進んで明かりがつくつなぎ方を調べようとしている。 【思表】豆電球が点灯するつなぎ方と点灯しないつなぎ方を比較し、明かりがつくときの電気の通り道を、豆電球、乾電池、導線のつなぎ方と関係づけて考え、説明している。
第2次	④ 回路にいろいろな物をつないで、金属は電気を通すことをまとめる。（本時）  ⑤ 金属の表面を非金属で覆われている物や非金属の表面を金属で覆われている物を回路につなぎ、電気が通るか調べる。 ⑥ 豆電球の明かりがつく回路のつなぎ方と、電気を通す物についてわかったことをまとめる。	④ 物の形ではなく、材質に注目させる。また電気を通した物と通さない物を比較させ、共通点を見つけさせ、まとめさせる。 ⑤ 実験を通して、金属と隙間が空くと電気は通らないということに気付かせるようにする。 ⑥ 本単元のまとめとして、理科の用語を用いて、まとめさせる。	【技】回路の途中に身の回りの物をつなぎ、豆電球の様子を比較しながら調べ、電気を通す物と通さない物とに分けて、結果を記録している。 【関】進んでいろいろな材質の物を調べようとしている。 【知理】物には電気を通す物と通さない物があり、金属は電気を通すことを理解している。

8 ユニバーサルデザインに関わって

① 授業研究に関わって

- 課題設定の工夫：児童がイメージしやすい課題，興味・関心のある課題の設定。  
 教材・教具の工夫：児童の身近にある物を実験対象として設定。  
 学習形態の工夫：ペアでの交流活動を設定。

- ② 教育環境の整備に関わって  
ICT機器の活用。集中しやすい教室環境整備。  
全員が教室前方に集中が向けられるような座席の配置。

## 9 本時の学習

(1) 日時 平成30年11月16日(金) 14:00～14:45

(2) 場所 3年1組教室

(3) 本時の目標

回路に物をつなぐ実験を通して、金属でできている物は電気を通す性質があることがわかる。

(4) 本時の学習活動

過程	学習活動と内容	指導上の留意点	言語活動における のぞましい子供の姿
導入 7分	<p><b>1 本時の問題をつかむ。</b> ・前時の振り返りをする。</p> <p>○本時の学習問題を確認する。 どんな物が、電気を通すのだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に学習した回路とは、一つの輪になっていることを復習する。</li> <li>・鉄のくぎと爪楊枝を回路の途中につないだとき、電気を通すかどうかを確認する(映像利用)。</li> <li>・物の形ではなく、材質に注目させる。</li> </ul>	
展開 10分	<p><b>2 予想をたてる。</b> ○どれが電気を通すのか予想する。 ・アルミニウムはくは通すと思う。 ・銅の10円玉は通すと思う。 ・紙は通さないと思う。 ↓ 発表する。 「私は、プラスチックのじょうぎは電気を通すと思います。なぜかという、同じプラスチックでできている下じきをかみの毛にこすりつけると、静電気がおきるからです。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「私は○○だと思います。なぜかという～～だからです。」という型をもとに書かせる。</li> <li>・生活体験を参考に、なぜ自分はそのように考えたかも書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活体験を基に、自分の予想を正確に相手に伝えることができるように書く。</li> <li>・自分の考えと同じところと違うところに注意して聞く。</li> <li>・自分の考えをわかりやすく伝える。</li> </ul>
20分	<p><b>3 実験をする。</b> ○実験の方法を確認する。 ・豆電球と乾電池を導線でつなぐ。 ・いろいろな物に導線をつけて、電気を通すかどうか調べて、記録をする。 ・班で行う。 ・ワークシートに記録する。 ↓ 発表する。</p> <p><b>4 結果を見て考察する。</b> ○予想を振り返り、考察したことをワークシートにまとめる。 ↓ 発表する。 「私は、銅の10円玉は電気を通すと予想しました。予想通り、電気は通りました。なので銅は電気を通すと考えます。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ショート回路を作らないように注意喚起する。</li> <li>・言語活動につながるように班で実験を行う。(班員は3～4人)</li> <li>・「私は○○と予想しました。結果は△△でした。このことから□□だと考えられます。」の型をもとに書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実験の結果を正確に記録する。</li> <li>・実験結果を正確に発表する。</li> <li>・結果を比較しながら聞く。</li> <li>・実験結果から読み取れることを、わかりやすくまとめる。</li> <li>・自分の考察と比較しながら聞く。</li> </ul>



まとめ 8分	<p><b>5 まとめる。</b></p> <p>○考察と実験結果から問題の結論を導き出す。</p> <p>○金属という言葉进行学习する。</p> <p>○結論をワークシートにまとめる。 『金属でできている物が、電気を通す。』</p> <p>○次時の予告を聞き、感想を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題に正対した形でまとめさせる。</li> <li>・考察をもとに、共通しているところや材質に注目させて考えさせる。</li> <li>・考えを深めるために、多くの意見を出させる。</li> <li>・次時に学習することの確認をする。</li> <li>・わかったことやもっと知りたいことを記入させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し手の考えが、正しいか判断しながら聞く。</li> </ul>
-----------	---	--	--

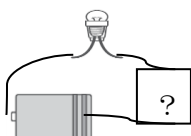
(5) 評価

回路に物をつなぐ実験を通して、金属でできている物は電気を通す性質があることを理解している。(授業中の発言・ワークシート)

(6) 板書計画

11/19 電気を通す物と通さない物

回路のどちゅうに、どう線以外の物をつなぐ。  
つく・・・電気を通す。  
つかない・・・電気を通さない。



どんな物が、電気を通すのだろうか。

観察・実験計画

- ・表に出ている物に、どう線の先をつける。
- ・班で調べる。

予想

○	×
---	---

結果

○	×
---	---

考察

- ・アルミニウムは電気を通すと思う。
- ・プラスチックは電気を通さないと思う。
- ・紙は電気を通さないと思う。
- ・鉄は電気を通すと思う。

金ぞく

金ぞく

まとめ

金ぞくのでできている物は電気を通す。

10 成果と課題

- “予想・考察・まとめ”の書き方の指導は、根拠を伴った考えを表現する力の育成に効果的であった。
- ICT機器を活用した教材提示は、学習活動に対しての意欲を高めることに役立っていた。
- ▲ 児童の意見交換の時間の確保が課題であった。無理にまとめを出すのではなく、予想段階での話し合いの時間を設けても良かった。

# 5 学年算数科学習指導案

指導者 神宮司香織

## 1 単元（題材）名 きまりを見つけて

## 2 単元（題材）の目標

変化する2つの数量の関係を表や式に表すことを通して、数量関係や規則性を見つける能力を伸ばす。

## 3 単元（題材）について

2つの量の変化のきまりに着目し、図や式などを用いて問題解決に取り組む学習である。解決に取りかかる際には、「変化のきまりを見つければ何個のときでも解決できそうだ」という課題意識、見通しをしっかりと持たせるようにしたい。また式の一般化、活用では、図や言葉と式を関連づけながらいねいに扱いたい。

また、変化のきまりを見つける際には、図、表、式などによって解決方法を説明させる。児童がそれぞれ目的意識をもって自力解決させたい。また、ペアや学級での発表を通して、それぞれの表現方法のよさを意識させたい。

## 4 本校の校内研究とのかかわり

本教材は、「具体的操作をし、表に記録する」「表からきまりを見つける」「見つけたきまりを式に表す」という流れで行う。それぞれの段階で見通しをもたせることで、児童一人ひとりが自力解決ができるようにさせていきたい。

また、見つけたきまりを他者にわかりやすく伝えられるように、図や表、式を用いて説明させていく。全体で説明をさせる前にペア活動を取り入れ、相手を意識した伝え方ができるようにしたい。また、全体の発表では、友達の発表と自分の説明を比べさせることで、説明するために必要な語句や簡潔な伝え方についての理解を深めていきたい。

## 5 単元全体の評価規準

「関心・意欲・態度」

2つの数量の変化について、対応する数値を表に表して、解決しようとしている。

「思考・判断・表現」

対応の規則性を式に表し、その式の意味を説明している。

## 6 指導計画（総時数 1時間）

①変化する2つの数量関係を表や式に表し、その式の意味を説明する。

## 7 ユニバーサルデザインに関わって

- ・具体物の操作を通して理解を促していく。
- ・課題解決の見通しを立ててから自立解決につなげていく。
- ・学級全体で発表する前に、ペア活動を取り入れ、説明の仕方を確認する。

## 8 本時の学習

(1)日時 平成30年10月29日(月) 2校時

(2)場所 5年1組 教室

(3)本時の目標

変化する2つの数量関係を表や式に表すことを通して数量関係や規則性を見つける能力を伸ばす。

(4)本時の学習活動

過程	学習活動と内容	支援・指導上の留意点	言語活動における のぞましい子供の姿
導入 5分	1. 本時の課題をとらえる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">長さの等しい棒で、正方形を作り、横に並べていきます。正方形を30個作るとき棒は何本ありますか。</div>	<ul style="list-style-type: none"><li>・正方形の作り方を実際に操作をさせ関心を持たせる。</li><li>・横に並べて正方形を作っていくことを確認する。</li></ul>	

<p>展開 35分</p>	<p>2. 正方形が5個のとき、必要な棒の数を求め、きまりを見つけたら。</p> <p>3. 正方形が30個のときの棒の数をきまりを使って求める。 ① 始めに1本あり、3本ずつ増える。 <math>1 + 3 \times 30 = 91</math>本 ② 始めの正方形は棒を4本使い、その後は3本で1つの正方形ができる。 <math>4 + 3 \times (30 - 1) = 91</math>本</p> <p>4. それぞれの考えを発表する。</p> <p>5. 正方形が50個のときの棒の数を計算で求める。 <math>1 + 3 \times 50 = 151</math>本</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>正方形の数が少ない場合で考え、棒の数と正方形の数の規則性に目が向くようにさせる。</li> <li>図や表から、棒の数が3本ずつ増えていることに着目させる。</li> <li>数が少ない場合で考えさせ、見通しを持たせる。</li> <li>正方形が5個のときのきまりをヒントに式を作るようにさせる。</li> <li>どのようにして式を作ったのかを図や表、言葉でかかせ、説明できるようにさせる。</li> <li>自力解決に戸惑っている児童には、①の方法で解決できるように、表の読み取り方を確認する。</li> <li>式を発表させ、数字が何を表しているのかを考えさせる。</li> <li>数人の児童に発表させ、説明の仕方について学ぶ機会とする。</li> <li>きまりから式を作ると、数が大きくなっても答えが求めやすくなることを確かめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えを図や式を使って説明している。</li> <li>友達の考え方を聞き自分の考えと比べながら聞いている。</li> </ul>
<p>まとめ 5分</p>	<p>6. 学習感想を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習感想を発表させ、本時で学習したことを確認するとともに、個人や学級のがんばりを認める。</li> </ul>	

(5) 評価

2つの数量の変化の仕方について、対応する数値を表に表すなどして問題を解決している。(ノート・観察)

9 成果と課題

- 数え棒で実際に正方形を作る操作をすることで、正方形1つに対して棒が何本必要になるかという具体的なイメージを持つことができた。
- 図、式、言葉で説明することを繰り返し行ってきたことで、見通しを持ちながら解決につなげていくことができた。
- 同じ方法でも、説明の仕方の違いや分かりやすい説明の仕方について学び合うことができた。
- ▲ 一般化された式に具体的な数値を当てはめることはできても、式の意味についての理解が浅い児童がいた。説明しあう段階で、式の意味についての理解を深める必要があった。

## 奇数学年ブロック研究授業のまとめ

本校の研究副題である「主体性を育む言語活動の充実」に向けて、根拠に基づいて推論をしたり、実験結果から事象について類推したりすることに重点を置いて取り組んできた。3年生の事前アンケートからは、理科の学習に対して興味・関心が高く、特に観察・実験による問題解決を好む傾向があるという結果が出た。一方で、今年度の「学力把握調査」では、理由を記入したり、順序立てて説明することを苦手としている児童が見られた。

そこで、奇数学年ブロックでは、次の点について検討してきた。

### (1) 授業過程の規格化

3年生の理科の学習では、「気づき→問題の導き出し→予想仮説の設定→検証計画の立案→実験の実施→結果の整理→考察や結論の導き出し」の流れで授業を行ってきた。理科の学習経験が浅い3年生の子供たちにとって授業の流れを規格化することは、見通しをもって学習に取り組めるだけでなく、順序立てて考える手立てになると考え、実践を行ってきた。

### (2) 考えを伝えるための型の提示

予想や考察、結論の伝え方を学ぶ機会とするために、「理科マスターへの道」と題して、考えを伝えるための型を提示した。話し合いの活動場面で、自分の考えを抵抗なく明確に伝えるための手立てとした。実際に有効であり、3年生の多くの児童が書いたことをもとに、ペアや学級での話し合いに活用することができた。また、考察と結論の違いについても意識させることができた。

#### ①予想の書き方

・わたしは〇〇だと予想します。なぜかというとき〇〇だからです。

(普段の体験を入れるとよい。)

#### ②考察の書き方

・わたしは〇〇だと予想しました。結果は、△△でした。このことから～だと考えられます。

(予想通り～、予想と違ってなどの言葉を使うとよい。)

#### ③結論の書き方

学習課題に合わせた結論を書く。

### (3) 家庭学習とのかかわり

より充実した家庭学習にするために、授業内容と関連づけて取り組めるように考えてきた。今回の授業との関連では、学んだことをまとめることに加え「豆電球に明かりがつくおもちゃを考えよう」というテーマを設定し取り組ませた。中でも、「金属探知機をつくらう」という内容で、家庭にあるものを電気を通すもの通さないものに分類した児童が複数いた。

## 校内研究会 偶数学年ブロックの研究について

### 1 児童が解決の見通しをもち、主体的に取り組む授業について

本ブロックでは、研究の基本的な考え方として研究主題にあげられているように、「主体性を育むためには、子ども任せにするのではなく、子ども一人一人の状況に応じて、子どもの主体性を尊重することと、教師が指導性を発揮することをバランスよく行うことが重要である」と考え、授業者自身が児童の取り組みをどう想定して、それをどう指導案に盛り込むのかということを重視した。その考え方に基づいて、児童の実態や事前調査、教材研究から、児童の考えを想定し、児童が進んで取り組もうと思える活動を設定した。

### 2 言語活動について

また、研究目標である「学習の基礎・基本である『話す・聞く・書く・読む』力等を育てる工夫に取り組むことにより、学習意欲が高まり『確かな学力』が育まれていくことを実践を通して明らかにする」を受けて、全体での発表の前段階として、ペアで話し合う活動を設定した。これは、ユニバーサルデザイン的には、内容や程度に様々な内容が想定される児童の考えを揃えるという意味合いももつが、理由を言って自分の考え方を発表することや、相手の考えをしっかりと聞くことがコミュニケーション力の向上とともに、基礎基本の学力の定着につながると考えるからである。

### 3 研究授業について

授業研究にあたって、本ブロックでは、単元全体の構想をしっかりと持って指導計画を組み立て、それを本時の授業に生かしていくことが大切であると考え、授業者が自分なりの教材観や指導観をもち、その上で自分なりの指導案をつくることを重視した。そのため、ブロック研究では、部員がそれぞれの立場で本時の授業について考え意見を述べたが、言い過ぎたり、押しついたりすることのないようにした。そのため、結果的に時間はかかったが、そこでの意見を参考に授業者が自分の力で指導案を書き上げることができたといえる。このことは初任者である本人にとってよい機会であり、それを十分に生かすことができたと考えられる。

## 1 単元名

「形をしらべよう」

## 2 単元の目標

○平面図形に親しみ、図形についての感覚を豊かにするとともに、三角形、四角形などの構成要素をとらえ、それらの意味や性質を理解する。

- ・身の回りにあるものの形の中から、三角形や四角形、長方形や正方形などを見つけようとする。  
(関心・意欲・態度)
- ・辺や頂点などの構成要素に着目して、三角形や四角形、長方形や正方形などの特徴を見出すことができる。  
(数学的な考え方)
- ・紙を折って直角を作ったり、長方形や正方形などを作図したりすることができる。  
(技能)
- ・三角形や四角形、直角、長方形、正方形、直角三角形の意味や性質を理解する。  
(知識・理解)

## 3 単元について

本単元で扱う三角形や四角形、長方形や正方形や直角三角形は、学習指導要領には以下のように位置づけられている。

### 第2学年 「B 図形」

- (1) 図形に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
  - ア 次のような知識及び技能を身に付けること。
    - (ア) 三角形、四角形について知ること。
    - (イ) 正方形、長方形、直角三角形について知ること。
  - イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。
    - (ア) 図形を構成する要素に着目し、構成の仕方を考えるとともに、身の回りのものの形を図形として捉えること。

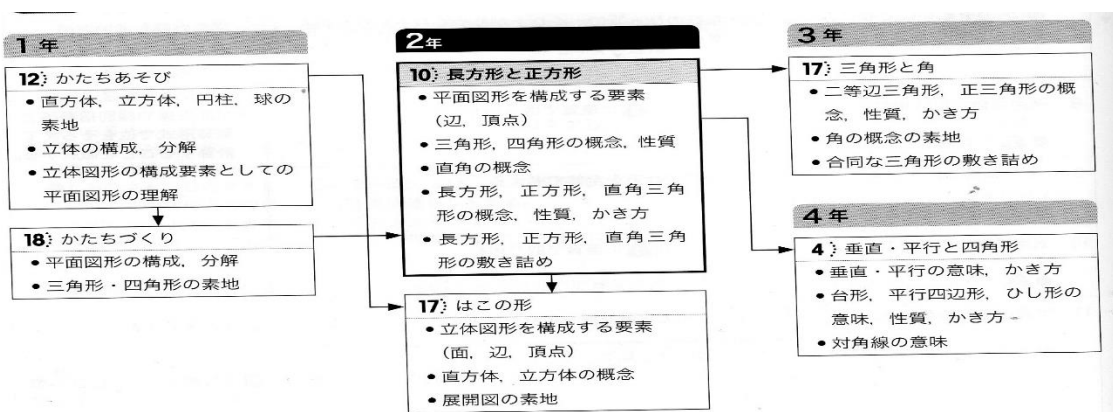
三角形と四角形については、児童は第1学年時の「かたちづくり」において、具体物の中から形のみに着目し、「さんかく」「しかく」などの日常の言葉を用いて初歩的概念にふれている。また、形を見つけたり、分解したりする活動を通して、形への興味関心を高めたり、素地的な体験を重ねたりしている。図形の構成に関わっては、2学年1学期「長さをはかろう」において、30センチの竹尺を使って長さを測ったり、直線を引いたりすることを学んでいる。したがって、図形を構成する際の基礎的な技能は、ほとんどの児童が身に付いている。これらの学習を踏まえて、本単元では「図形に関わる数学的活動を通して、三角形や四角形、長方形や正方形や直角三

角形の知識及び技能，図形を構成する要素に着目し，構成の仕方を考えるとともに，身の回りのものの形を図形として捉える思考力，判断力，表現力を身に付ける。」ことをねらいとして，具体的に次のような学習を進める。

まず，3本の直線で囲まれている形を「三角形」，4本の直線で囲まれている形を「四角形」と名付ける。図形を構成する要素である「辺」の数によって三角形と四角形を定義し，いろいろな図形を三角形や四角形に分類したり，弁別したりする学習を通して図形への認識を深められるようにする。また，図形の構成要素である「辺」の交わっている点を「頂点」とし，三角形や四角形で辺の数と頂点の数は同じであることをとらえるようにし，三角形や四角形をかくことができるようにする。さらに，身近にあるかどの形は，平角を2等分したかどの形と同じであることを知り，それを「直角」と定義し，「直角」や辺の長さという構成要素で，四角形の特徴を見直す。そのなかで，これまで児童が「ましかく」と呼んでいた四角形について，4つのかどが直角で，4つの辺の長さが同じ四角形を「正方形」，4つのかどが直角である四角形を長方形と定義し，認識できるようにする。単元全体の活動を通して，児童の既習の学びや経験による図形への認識を生かしながら，図形概念の基礎的な認識を養い，作図や敷き詰め等の図形を構成する活動を通して，実感を伴った理解を深めさせることを目的としている。

そのために，指導においては，児童の現状の図形認識を把握しながら学習を進め，それを生かしながら一般的な概念の形成につなげていきたい。具体的には，敷き詰め・作図・図形を利用した模様づくりや，身近な場所から正方形や長方形を探す活動など，多様な数学的活動を通して，児童の気づきを引き出しながら図形に関する用語や概念の定義とともに，児童自身の実感を伴った理解へとつなげていきたい。また，人に説明することが知識や技能の定着，学習内容のより深い理解に効果的であることを踏まえて，お互いに自分の考えを伝え合うペア学習を取り入れていきたい。

#### 4 本単元の学習の関連と発展



#### 5 児童の実態

本学級の児童（男子10名，女子14名）は，算数の学習に対して興味・関心を持ち，授業中も挙手をして自分の考えを発言する児童が多い。友だちの考えに対して，「似ています」「同じです」など，関連付けて自分の考えを発言することもできる。しかし，学習の理解や作業における個人差が大きく，休み時間等を利用して，基礎的な知識・理解に対する個別的な補充指導を行っ

ている。また、学習の定着を図るために、復習・繰り返し学習にかかわるプリント学習等に取り組み、すべての児童に基礎的な知識・理解が保障されるように継続的な指導を行っている。

## **6 校内研究とのかかわり**

本校の校内研究主題は「学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成～主体性を育む言語活動の充実と家庭学習の工夫を通して～」である。「学びの基礎・基本」である「話す・聞く・書く・読む」力を本時の授業の中で育てるために、特に「話す力」の育成に重点を置く。そのために、普段の授業では自分の考えをみんなに説明したり、友だちの意見を聞いて似ている点、同じ点、違う点を発表したりすることを行っている。単元を通して、自分の考えを発表したり、ペアで話し合ったりすることを取り入れたい。家庭学習では、家庭との連携を通して授業の復習や予習、発展学習を行う児童が多く、継続して取り組むことの大切さを伝えている。次に、「確かな学力の育成」のために、ユニバーサルデザインを取り入れた授業を行いたい。具体的には、児童が興味関心のある課題提示や、操作しやすい教具の準備、個別・ペア学習を取り入れ、本時の課題解決に迫りたい。

## **7 単元全体の評価規準**

### **【算数への関心・意欲・態度】**

- ・ 図形の辺や頂点の数に着目して、図形を分類しようとしている。
- ・ 身の回りにあるものの形の中から直角を見つけようとしている。

### **【数学的な思考・表現】**

- ・ 構成要素などを観点として、三角形や四角形の弁別の仕方を考え、説明している。
- ・ 図形に置かれた位置に関係なく、長方形の意味や性質を見出し、説明している。
- ・ 図形の置かれた位置に関係なく、正方形の意味や性質を見出し、説明している。

### **【数量や図形についての技能】**

- ・ 三角形や四角形を弁別したり、格子点を結んで作図したりすることができる。
- ・ 紙を折って直角を作ることができる。
- ・ 方眼を用いて、長方形、正方形、直角三角形を作図することができる。

### **【数量や図形についての知識・理解】**

- ・ 三角形、四角形の意味や性質を理解している。
- ・ 直角三角形は1つのかどが直角になっている三角形であることを理解している。

## **8 指導計画**

総時数10時間

第1次 三角形と四角形（4時間）

- ① パズルを使って平面図形に親しむ活動
- ② 辺や頂点の数に着目して図形を分類する活動（本時）
- ③ 「三角形」「四角形」の意味や性質の理解
- ④ 三角形、四角形の弁別

第2次 長方形と正方形（4時間）



- ① 「直角」の意味の理解，直角を見つけること
- ② 「長方形」の意味や性質の理解
- ③ 「正方形」の意味や性質の理解
- ④ 「直角三角形」の意味や性質の理解

第3次 まとめ（2時間）

- ① 身の回りにある正方形や長方形を探す活動，合同な長方形や直角三角形などで敷き詰め模様を作る活動
- ② 学習内容の理解

## 9 本時の学習

(1) 日時 平成30年10月22日（月） 14:00～14:45

(2) 場所 2年1組教室

(3) 本時の目標

図形の辺や頂点の数に着目して，図形を分類することができる。

(4) 本時の学習活動

過程	学習活動と児童の反応	指導上の留意点	言語活動におけるのぞましい子供の姿
導入 3分	1 前時までの学習を振り返る。 ○図形を使ってパズルをしたことを思い出す。	・パズルで使った図形は多様な形があることに気付かせる。	・どんな形をつくったか思い出し，発表しようとしている。
2分	2 本時の課題をつかむ。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">【めあて】 形をなかまわけしよう。</div>	・パズルで使った図形を仲間分けすることができないか，みんなで考えてくことを伝える。	
展開 10分	3 本時の課題を考える。 ○パズルの図形をどのようにして分けられるか考える。 ・8枚のパズルで使った図形を，自分の考えで仲間分けをする。 ・仲間分けしたものをワークシートに並べ，理由を書く。	・机間巡視を行い，迷っている児童には似ている形がないか声をかける。 ・仲間分けをした図形は，ワークシートに記号も書き，丸で囲んで分かりやすくする。 ・児童の考えを知り，発言につなげる助言をする。	・自分の言葉で理由や考えをワークシートに書こうとしている。
2分	○ペアになって自分の分け方を伝え	・理由を発表し，考えを	・ペアで自分の考えを

8分	<p>合う。</p> <p>○自分で考えた図形の分け方を全体に教える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分け方を書いたワークシートを実物投影機に映して発表する。 (予想される反応)</li> <li>・さんかくとしかくに分けた。</li> <li>・しかくとましかくに分けた。</li> <li>・しかくとしかくみたいな形，さんかくと長細いさんかくに分けた。</li> </ul>	<p>交流させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パズルのどの部分に着目したかを発表の中に入れる。</li> <li>・分けた理由も伝えられるようにする。</li> <li>・発表に戸惑う児童がいた場合は，支援をする。</li> </ul>	<p>話し合おうとしているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを理由や根拠に基づいて発表しようとしている。</li> </ul>
10分	<p>・児童の分け方や発言から，図形のどの部分に着目すれば仲間分けできるか考え，ノートに書く。 (予想される反応)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・直線の本数が3本と4本。</li> <li>・かどの数が3つと4つ。</li> </ul> <div data-bbox="272 1216 735 1384" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p><b>【まとめ】</b> 形は，直線やかどの数でなかまわけをすることができる。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着目できない場合は，直線を指でなぞったり，角の数を数えたりして気付かせる。</li> <li>・直線やかどの数の違いで，形を分けられることに気付かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「似ていて」「違って」など，友だちの意見と関連付けて発表しようとしている。</li> </ul>
終末 9分	<p>5 学習感想を書く。</p> <p>○ワークシートに今日の分かったことを書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三角と四角の仲間分けの観点について書けるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の言葉で分かったことを書こうとしている。</li> </ul>
1分	<p>6 次回の予告を聞く。</p>		

(5) 本時の評価

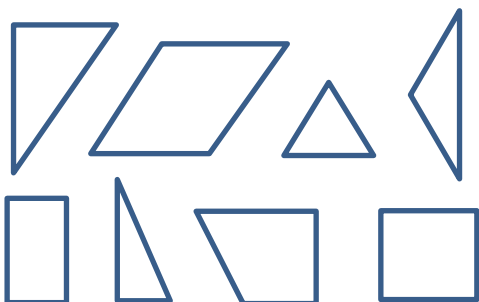
図形の辺や頂点の数に着目して，図形を分類することができたか。

(授業中の発言，ワークシートの記述)

## (6) 板書計画

㊦形をなかまわけしよう。

○どのようななかまわけができるか  
考えよう。



- ・さんかくとしかくにわけた。
- ・しかくとましかくにわけた。
- ・直線の数が3本と4本。
- ・かどの数が3つと4つ。

㊦形は、直線やかどの数でなかまわけを  
することができる。

### 10 成果と課題

- 児童の多様な考えを引き出して、図形の仲間分けの仕方について深めることができた。
- 自力解決の時間を十分に確保したことで、机間指導を通して児童一人一人が自分の考えを持つことができた。
- ▲児童の考えを交流させる際に、教師が児童の着眼点を確実におさえることができず、児童の多様な考えをもとに図形を分類することができなかった。机間巡視の際に、児童の考えを確認して意図的に発言をさせていくとよい。

## 第4学年1組 道徳科学習指導案

指導者 城内 優子

### 1 題材名（主題名） 「えがおのクリクラウン」（笑顔のチカラ）

### 2 内容項目 生命の尊さ（生命の尊さを知り，生命あるものを大切にすること）

### 3 題材について

本題材は，つらい闘病生活を送りながら院内学級で学ぶ夫人校の様子を通して，ねらいに迫るものである。二人のクリクラウンの笑顔に出会うことによって，元気を出すまでの様子が描かれている。全国には院内学級に学ぶ小中学生が多くいることを知り，彼らの不安や寂しさ，退院したいという願いや焦りについて考えさせる。クリクラウンは，笑いで患者の子供たちに治癒力や希望を与えていることに注目させ，尊い命を支える応援団であるという理解を深めさせる。

4年生は，元気で楽しく過ごす毎日においては，自分の生命の尊さについて振り返る機会がそう多くない。しかし，病気やけがをしたとき，家族が心配したり友だちが見舞いに来てくれると，健康の大切さに気付くことがある。玄以になって登校したときの先生や友だちの笑顔は，誰もがうれしいと心に刻んでいるものである。健康なときから，この感謝の気持ちを忘れずに，与えられた命を大切に生きていこうとする気持ちや，だからこそ生命というものは他社から支えられてあるものだという事に気づいていくことが大事になってくる。4年生は総合的な学習の時間の活動として，城東病院を訪問して，入院患者さんとの交流を計画している。本題材を通して，実際に入院している患者さんにどんな態度で接することが大切かを考える良い機会でもある。

本指導内容は，生命あるすべてのものをかけがえのないものとして尊重し，大切にすることに関するものである。第3学年及び第4学年の段階になると，人の死について現実性をもって理解できるようになると言われている。病気やけがをしたときに，自分の生命は一つしかないかけがえのないものだと知る機会も増えてくる。しかし，大切なのは自分自身の生命だけでなく，生命あるものすべてに対して大切に思うことである。お互いに支え合ったり応援したりすることが必要だということに，実感がないことも多い。城東病院訪問を前に，この題材を取り扱うことにより，わかったことを具体的な対象である病院の入院患者さんと接する際にどう生かすかを具体的に考えさせるために，ワールドカフェ方式を取り入れ，笑顔にはどんな力があるのか考える。そして，自分が笑顔のもつ力を知ったうえで，笑顔で患者さんと接することができるように一人一人がそれぞれの目標をもって活動に臨んでほしい。

### 4 本校の校内研究とのかかわり

研究副主題にある「言語活動の充実」に関わって，「話す力」②自分の思いや考えを伝えようとするとともに，相手の思いや考えを理解し尊重できるようにすること。「書く力」②自分の気持ちなどを正確に相手に伝えられるように書くことができる。以上の点に重点をおき，笑顔にはどんな力があるか，自分の考えを自分の言葉で伝えることができるような場面を取り入れる。

### 5 評価のポイント

- ①自分自身の生命だが，他者も自分と同じようにその生命を大切に思っていて，支えている人がいることに気づき，生命とは支え合う存在である点を深く学んだか。
- ②人間の生命は尊いものだとお互いに気付いているからこそ，お互いに相手の生命を支えていこうとする心情が深まったか。

### 6 ユニバーサルデザインに関わって

- ・お互いの考えを伝え合い共有するために、ワールドカフェ方式を取り入れる。

## 7 本時の学習

(1)日 時 平成30年11月5日(月) 3校時

(2)場 所 4年 1組 教室

(3)本時の目標 (題材のねらい)

笑顔によって生命は他者からも支えられていることに気づき、生命を尊び、大切にしようとする判断力を育てる。

(4)本時の学習活動

過程	学習活動と内容	支援・指導上の留意点
導入 5分	<p>1. 「クリクラウン」という意味について考える</p> <p>○「クリクラウン」というのはどういう人たちか知っていますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・病院のことをクリニックっていうよ</li> <li>・赤い鼻がピエロみたい</li> <li>・クリニックとクラウンが合体した言葉なんだ！</li> </ul> <p>【見通し】 クラウンという言葉の意味を確認し、病院に来るクラウンの目的について考えてみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院＝クリニック ピエロ＝クラウン</li> <li>・病院でピエロのように患者さんを笑顔にするための存在であることを押さえる。</li> <li>・城東病院を訪問したことを思い出させて、本時の学習とのつながりを意識できるようにする。</li> </ul>
展開 3分 3分 5分	<p>2. 「えがおのクリクラウン」を読んで、話し合う</p> <p>○クリクラウンやお母さんが笑顔でいてくれるとき、ひろ子さんの心の中はどう変わるのでしょ。 (挙手)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寂しさや不安が消えて安心する</li> <li>・病気に負けず頑張ろうと思う</li> </ul> <p>○ひろ子さんが、クリクラウンと会うことを心待ちにしたのは、なぜなのでしょう。(挙手)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・隣の子もとても楽しそうだから</li> <li>・自分も楽しい気持ちになりたいから</li> </ul> <p>○退院できると信じて頑張って生きるひろ子さんについて、どう思いますか。(ノートに記述してから発言)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・笑顔で応援に応えようとしていると思う</li> <li>・周りの人の応援に感謝する気持ちが、ひろ子さんを前向きにさせているのだと思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主人公が闘病生活の間でも、お母さんという時間やクリクラウンという時間に、明るく過ごせた生き方から学ぶということに気づくことができるようにする。</li> <li>・病気や死の教材は気持ちが落ち込むが、ここでは前向きに生きようとする主人公の意欲と他者の支えに注目できるようにする。</li> <li>・単なるピエロの面白さだけではなく、病気から元気になりたいという葛藤の部分にまで触れて考えられるように、主人公のひろ子の置かれた心理状況を共感的な理解と共に考えられるように発問で繰り返す。</li> </ul>
24分	<p>3. 笑顔にはどんな力があるかについて話し合う</p> <p>○病気がちだったり、体が不自由だったりする人に対して、笑顔は、具体的にどんな力があると思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生きる力を与えてくれるという力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの際には、ワールドカフェ方式を活用する。</li> <li>◇班で話し合う。中央に模造紙を置き、そこに書き込む。</li> <li>◇リーダーを残して、他者は他のグループへ移動。リーダーは新たな仲間</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うれしくなって、今が楽しいと感じさせてくれる力</li> <li>・笑顔の人自身にも、元気をくれる力</li> </ul>	<p>に話し合いの結果を報告。また討議，書き込み。</p> <p>◇最後にそれぞれのリーダーが発表する。</p>
まとめ 5分	<p>4. 本時のまとめとして、道徳ノートに書き込みをする</p> <p>○笑顔のもつ力を、3か条として書いてみましょう。</p> <p>【振り返り】</p> <p>クリニックラウンは病院の患者さんにとってどんな存在だったのか。目的は何だったのかわかったことを書こう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポイントの完成が目的でなく、自分が元気に生きていて、笑顔で相手を元気にして、また、相手からも元気をもらうことが生命の尊重であることを説話する。</li> </ul>

#### (5) 評価

自分自身の生命だが、他者も自分と同じようにその生命を大切に思って、支えている人がいることに気づき、生命とは支え合う存在である点を深く学んだか。(ノート・観察)

### 8 成果と課題

- 題材の内容を理解し、子供たちがそれぞれ「笑顔の力」について自分の考えを記述し、友だちに説明することができた。ワールドカフェ方式を取り入れたことによって、話し合い活動を活発に行うことができた。
- 実態に即した指導計画の下、子供たちがそれぞれの考えを表現しやすいように、学習形態の工夫を行っていた。そのため、一人一人が意欲的に活動に臨み、学習目標の達成につながっていた。
- ▲本題材のねらい「生命の尊重」については、この授業だけでは達成できないものである。そのため、表面的な価値観ではなく、繰り返し日常生活においても考えていけるようにすることが大切である。

## 1 単元（題材）名

「比例をくわしく調べよう」

## 2 単元（題材）の目標

伴って変わる2つの数量の関係を考察することをとって、比例や反比例の関係について理解し、関数の考えを伸ばす。

## 3 単元（題材）について

第5学年で、伴って変わる2つの数量の関係について、「○は□に比例する」という表現することを学習してきた。第6学年では、比例についてさらに考察を進めると共に、反比例についても学習し、関数の考え方を伸ばしていくことをねらいとしている。

また、「比例の利用」の学習では、比例とみて、日常生活の中にある問題を解決させる。具体的な表を基にしなが、変化の様子についていろいろな数値について実際に調べるなど、できるだけ、実際に体験活動を行いながら考えさせるようにしたい。

指導にあたっては、既習の考えを生かしながら、自分なりに解決方法を考え出すプロセスを大切に、学習したことを日常生活で活用していけるように学習を深めていきたい。

## 4 本校の校内研究とのかかわり

本時は、比例の性質を活用することによって、必要な枚数の紙を用意することができることを、自分なりに考え、意見を交流し深め合う中で、解決する学習である。

本校の研究である「言語活動の充実」に関わり、自分に考えを持ち、相手に分かるように説明すること、友だちの考えを聞いて、自分の考えと同じところや分かりやすいところがないか考え、深めることができるように進めていきたい。

## 5 単元全体の評価規準

○比例の関係に着目するよさに気づき、比例の関係を生活や学習に活用しようとする。

（関心・意欲・態度）

○比例の関係を表や式、グラフに表し、特徴を一般化してとらえ、身の回りから比例の関係にある2つの数量を見出して問題の解決に活用することができる。（数学的な考え方）

○比例や反比例の関係にある2つの数量の関係を表や式、グラフに表すことができる。（技能）

○比例や反比例の意味や性質、表やグラフの特徴について理解する。（知識・理解）

## 6 指導計画（総時数 11 時間）

第1次 比例の式（3）

- ・比例の式（ $Y = \text{決まった数} \times X$ ）を理解する。

第2次 比例の性質（1）

- ・比例の性質について理解する。

第3次 比例のグラフ（3）

- ・比例のグラフの特徴を理解する。
- ・比例のグラフについて理解を深める。

第4次 比例の活用（3）

- ・比例の性質を活用する。
- ・問題を解決する。

第5次 反比例（5）

- ・反比例の意味を理解する。

- ・反比例の式（ $Y = \text{決まった数} \div X$ ）を理解する。
- ・反比例の性質について理解する。
- ・反比例のグラフの特徴を理解する。

#### 第6次 まとめ（1）

- ・学習内容の定着を確認し，理解確実にする。

### 7 ユニバーサルデザインに関わって

算数においては，実物投影機を利用し，ノートを映しながら自分の考えを説明させる活動を通して，多様な考え方を持つことができるようにしている。

### 8 本時の学習

(1)日 時 平成30年11月 6日（火） 5校時

(2)場 所 6年 1組 教室

(3)本時の目標

比例の性質を活用し，問題を理解することができる。

(4)本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点（・） 手立て（△）						
導入 (5分)	1 本時までの振り返りをする。 ・比例とは。  2 本時の学習課題をつかむ。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">             全部数えないで，紙を300枚用意する方法を考えよう。           </div>							
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何が変わると，何がかわるか。</li> <li>・10枚の重さが， ___ gであることを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に紙を用意し，関心を高める。</li> <li>・紙は全部同じもの。</li> <li>・実際に量る。</li> </ul>						
展開 (30分)	3 自力解決をする。 ・自分の考えを，表や式，言葉を用いて，ノートに記入する。  紙の枚数と重さ <table border="1" style="margin: 10px auto;"> <tr> <td>枚数(X枚)</td> <td>10</td> <td>300</td> </tr> <tr> <td>重さ(Y g)</td> <td>___</td> <td></td> </tr> </table> など  4 考えを発表し合う。 A：1枚の重さを求める方法 B：比例の性質を使った方法 C：決まった数を求める方法	枚数(X枚)	10	300	重さ(Y g)	___		<ul style="list-style-type: none"> <li>・考えが書けた児童には，別の方法を考えさせる。</li> <li>△机間巡視し，とまどっている子供には，10枚の紙を提示し，1枚の重さが何gになるか考えさせたり，10枚の何倍が300枚か考えさせる。</li> <li>△表に矢印を使って，比例関係を捉えさせる。</li> <li>△ヒントカードを用意する。</li> <li>・自分の考えとの共通点や相違点について考えながら聞かせる。</li> </ul>
枚数(X枚)	10	300						
重さ(Y g)	___							
まとめ	5 まとめをする。 ・実際に確認する。 ・分かったことをまとめる。							



(10分)	紙の重さは、枚数に比例することを使うと、紙を全部数えなくてもおよその枚数を用意することができる。	
	6 練習問題に取り組む。(時間があったら)	

- 教科書P 135  $\triangle$  1 に取り組む。
- 学習感想を書く。

(5) 評価

比例の性質を活用し、問題を理解することができたか。

## 9 成果と課題

- 一人一人が、課題に対して既習事項を確認しながら、自分の考えを、ノートに書くことができた。
- 自分の考えを発表したり、友だちのやり方を聞いたりして交流し合う場面では、自分の考えと同じところや分かりやすいところがないか考えながら聞くことができ、さらに考えを深めることができた。
- 本時の学習過程がわかるような、問題提示・自己解決・まとめ・学習感想という「マイ・ノート」を工夫して書くことができた。
- △自分の考えがノートに書けても、発表をすることに抵抗がある児童が数名いる。机間巡視をしながら声をかけて自信を持たせたり、自分の考えを発表する場面を日常的に設けたりしていきたい。

## 1 単元（題材）名

てこのはたらき

## 2 単元（題材）の目標

てこの仕組みに興味をもち、おもりを持ち上げて手応えの大きさを調べ、てこを傾けるはたらきは、作用点の位置や力点の位置によって変わることができるようにする。また、実験用てこで、てこが水平につり合うときの左右のおもりの重さと支点からの距離を調べ、てこが水平につり合うときの決まりを発見するとともに、てこを利用した道具の仕組みや使い方を考え、身の回りのさまざまな道具でてこが利用されていることを捉えることができるようにする。

## 3 単元（題材）について

本単元では、生活に見られるてこについて興味・関心をもって追求する活動を通して、てこの規則性について推論する能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、てこの規則性について見方や考え方をもちつことができるようにしたい。そのために、実験の結果を表などに整理する活動を取り入れ、表をもとに規則性に気づかせたり、結果を表などに整理する力を身に付けさせたりしたい。

## 4 本校の校内研究とのかかわり

○学びの基礎・基本に基づいた確かな学力を育てるために、言語活動を取り入れた授業を展開し、自分の考えを表現できるようにする。

- ・ 1時間の授業でどのような学習をするのか、デジタル教科書などを活用して学習課題を明確にして取り組ませる。
- ・ 観察・実験の結果を図や文章でまとめさせ、そこからわかることを「支点」「力点」「作用点」などの理科の言葉を使って自分の考えを表現できるようにする。

## 5 単元全体の評価規準

- てこについて興味を持ち、進んでてこがつり合うときの決まりを調べたり、てこを利用した道具を探したりしようとしている。（関心・意欲・態度）
- 複数の実験結果から、てこがつり合うときの決まりを推論し、その考えをわかりやすく表現している。（思考・判断・表現）
- てこを傾ける働きのおもりの重さと位置に関係することを理解している。（知識・理解・技能）

## 6 指導計画（総時数10時間）

- 第1次 てこのはたらき③
- 第2次 てこが水平につり合うとき⑤
- 第3次 てこを利用した道具②

## 7 ユニバーサルデザインに関わって

○どのような学習をするのか、ICTなどを活用して学習課題を明確にして、授業の見通しを持って取り組ませる。

## 8 本時の学習

- (1)日 時 平成30年11月9日（金） 5校時
- (2)場 所 理科室
- (3)本時の目標

てこを使って楽に物を持ち上げるには、作用点の位置や力点の位置をどのようにしたらよいかを予想して、てこを傾けるはたらきの変化を調べることができる。

(4) 本時の学習活動

授 業 の 流 れ		
過程 (分)	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入 (5分)	1 本時の学習課題を確認する。  てこを使っておもりを持ち上げるとき、小さい力で持ち上げるには、どうしたらよいのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「てこ」「支点」「力点」「作用点」という用語を確認し、前時でてこを使うと重い物を楽に持ち上げられたことを想起させる。</li> <li>・棒を使った手応えの大きさを比べることを確認する。</li> </ul>
展開 (30分)	2 予想する。 ○班ごとにてこを用いて活動し、小さい力で持ち上げる方法について考える。 ・支点から遠いところを持ったとき、軽く感じた。 ・支点の近くにおもりをつるしたら軽く感じた。  3 実験する。 ○支点と作用点の距離、支点と力点の距離を変えてそれぞれの手応えを調べる。 ・作用点だけを動かして、支点と力点は、動かさない。 ・力点だけを動かして、支点と作用点は、動かさない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・てこを使っておもりを持ち上げたとき、軽く感じたり重く感じたりしたのはなぜかを考えさせる。</li> <li>・「支点」「力点」「作用点」を使って考えを書かせる。</li> <li>・棒の扱いなど安全に留意させる。</li> <li>・支点と作用点までの距離と、支点と力点までの距離を変えて、それぞれの手応えを調べさせる。</li> <li>・調べる条件と同じにする条件を整理して実験に取り組ませる。</li> </ul>
まとめ (10分)	4 実験の結果をまとめる。 ○各班の結果を発表する。 ・作用点を支点に近づけると手応えが小さくなった。 ・力点を支点から遠ざけると手応えが小さくなった。 ○結果をまとめる。  てこを使って小さい力でおもりを持ち上げるには ・支点と作用点の距離を短くする ・支点と力点の距離を長くする  ○片づけをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各班の実験結果を発表させ、他の班の結果と比較して、実験結果から分かることを話し合わせる。</li> <li>・「支点と作用点のきょり」「支点と力点のきょり」という共通の言葉を使って話し合いを行う。</li> <li>・「手応えが小さいこと」の意味を確認させ、まとめに結び付けさせる。</li> </ul>

(5) 評 価

実験結果から、食塩が水に溶けたときの重さについて考え、自分の考えを表現している。

9 成果と課題

○児童が見通しをもって観察・実験などを行い、そこで得られた結果を基に考察したり表現したりすることができる児童が多かったが、自分の考えを伝え合ったうえで、自分の考えを見つめ直し校正することができない児童もいた。

# 偶数学年ブロックの研究授業のまとめ

## 1 研究主題に関わって

「学びの基礎・基本」として大切な「話す・聞く・書く・読む」力を育むために、授業者は日常的に自分の考えをみんなに説明したり、友達の意見を聞いて似ている点や同じ点、違う点を発表したりすることを行ってきた。研究授業の対象とした単元では、特に「話す力」の育成に重点を置き、自分の考えを発表したり、ペアで話し合ったりすることを取り入れた。

また、「確かな学力の育成」のためには、誰にでもわかりやすい授業としてユニバーサルデザインを意識し、児童が興味関心のある課題提示や、操作しやすい教具を準備することに力を注いだ。

## 2 研究授業について（討議の視点から）

① 「児童は学習課題に対して、自ら解決の見通しをもちながら、主体的に取り組むことができたか。」

図形を分類するという本時の中心課題をあえて数を指定せずに行かせたことは、子どもたちから色々な考え方を引き出したという授業者の意図であったが、子どもたちは期待どおり自由な発想で仲間分けを行い、主体的に取り組む姿を見せてくれた。しかし、教科書の展開どおり2つに分類するという課題設定であったなら、「ひし形」と「台形」いう形について焦点化することができたのではないかという意見もあった。

② 「ペア活動は、目標達成に対して有効に働いたか。」

子どもたちは、自分の考えを相手に伝えることには慣れており、自分がどのような視点から仲間分けをしたのかをペアの友だちに伝えることはできていた。しかし、2分間という短い時間設定では、双方が言いっぱなしで終わってしまっていたことが残念であった。この部分に関しては、個人の活動を行わずに始めからペアで活動して十分に時間を確保することや、やりとりのしかたをパターン化して練習するなどの工夫が考えられるといった意見が出された。

## 3 授業全体を通して

自分が考えた分類を発表する活動は、ワークシートを実物投影機でテレビ画面に映し出して行なった。これは、子どもたちが作業したものをそのまま提示できる効果的な手段であったが、消えてしまって残しておけないという点で、改善の余地がある。本時の目標は、「辺や頂点の数に着目して図形を分類する」ことであり、子どもたちの意見（ワークシート）を整理し、どんな時にも納得できる分類の仕方を子どもたちが見つけるためには、それらを視覚的に並べて示すことで比較するといった活動が有効だと考えられるからである。

ともあれ、研究授業全体を通して、どの子も真剣に授業に取り組み、考えたり発表したりする姿を見ることができた。これは、授業者の日頃の学級経営と授業実践の成果であるといえる。そして、その後の研究会では、偶数学年ブロックのメンバーだけでなく、参加者は皆、そこでの討議や指導主事の指導助言から多くのことに気づき、学ぶことができたことと思う。このような学びのある授業を提供してくれたことに、ブロックとして感謝したい。

# 特別支援学級 学級活動 学習指導案

指導者 今村さつき  
竹内かおり(養護教諭)

## 1 題材名 よくかんで食べよう

## 2 題材の目標

- かむことに関心をもち、食べ物をよくかんで食べようとする。(関心・意欲・態度)
- よくかむことの効用から、自分の生活を振り返り、課題を見つけて発表する。(思考・判断・表現)
- よくかむことの効用を知って、意識してよくかむことができる。(知識・理解)

## 3 題材について

よくかむことは、消化を助け、歯やあごの発達を促し、脳のはたらきをよくするなど大切なはたらきがある。「好きな給食の献立」のアンケートをしたところ、カレーライス、ハヤシライス、ビビンバなど、児童は硬いものより軟らかいもの、あまりかまなくても食べられる料理を好む傾向がある。「よくかんで食べなさい。」と言われても、毎日の食事でよくかんで食べようと意識することは少ない。そこで、かむことの効用を理解することによって、よくかんで食べる食習慣を身につけ、毎日の食事で実践できるようにしたいと考え、本題材を設定した。

## 4 児童の実態

本学級は、知的障害特別支援学級である。 以下 省略

## 5 本校の校内研究とのかかわり

「言語活動の充実」に関わって、よくかむことの5つ効用の中から何を意識してよくかむようにしたいのか、自分の生活を振り返り、課題を見つけて発表する場面を設定する。

## 6 題材全体の評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
・かむことに関心をもち、食べ物をよくかんで食べようとする。	・よくかむことの効用から、自分の生活を振り返り、課題を見つけて発表することができる。	・よくかむことの効用を知って、意識してよくかむことができる。

## 7 指導計画

	活動内容	教師の指導・支援
事前	・「好きな給食の献立」アンケートを実施する。	・食の傾向をつかむ。 ・給食時の食事の様子を把握する。
本時	・よくかんで食べることの効用を知る。	・よくかんで食べる体験や養護教諭の話を通して、よくかんで食べようとする意欲をもたせる。
事後	・意識してよくかんで食べる。	・よくかんで食べている児童を称賛する。 ・習慣化できるように、意識してよくかむことを継続して促していく。 ・本時の学習内容を連絡帳や学級通信で紹介して、家庭での実践をお願いする。

## 8 ユニバーサルデザインに関わって

- ・見通しをもって取り組めるように，学習の流れを示す。
- ・かむことへ興味・関心がもてるように，カミカミ番付表を参考にして食品を選ぶ。
- ・よくかむことの5つの効用がわかるように，視覚的資料で示す。

## 9 本時の学習

- (1)日 時 平成30年11月19日(月) 5校時  
 (2)場 所 やまなみ教室  
 (3)本時の目標 かむことの大切さに気づき，意識してよくかんで食べる。  
 (4)本時の学習活動

過程	学習活動と内容	支援・指導上の留意点
導入 3分	1. 今日の学習内容を知る。 ・きょうの学習 ・かんで食べよう① ・かおり先生の話 ・かんで食べよう②(練習) ・かんで食べよう③(本番) ・感想発表	・見通しをもって取り組めるように，本時の学習の流れを示す。
展開 7分	2. かんで食べよう① (1)ゼリーを食べる。かむ回数を数える。 ・軟らかいからあまりかまない。 ・かんだ回数は～回 (2)小魚ナッツを食べる。かむ回数を数える。 ・ゼリーより硬いからよくかんだ。 ・かんだ回数は～回 ・あごがつかれた。 ・つばがいっぱいでした。	・導入では軟らかいものと硬いものごとを食べて，かむことについての興味・関心を高め，動機づけを図る。
10分	3. よくかむことの5つの効用を知る。(竹内T) あ・・・あごをつよくする い・・・胃のはたらきをたすける な・・・なんでも食べられる の・・・脳のはたらきがよくなる ダ・・・ダイエット効果がある 4. 学習課題を確認する。 「よくかんで食べよう ～よくかむことはあいなのだ 一口30回～」 ○よくかむことの5つ効用の中から，何を意識してよくかむようにしたいのかを発表する。 ・なんでも食べられるようになりたい。 ・ダイエットしたい。	・よくかむことの5つの効用がわかるように，視覚的資料を示す。 ・学習課題を明示する。 ・よくかむことの5つの効用がわかるように，視覚的資料を示す。

20分	<p>5. かんで食べよう②(練習)</p> <p>○フランスパンを食べる。かむ回数を数える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・硬いからよくかんだ。</li> <li>・かんだ回数は～回</li> <li>・一口30回をめざそう</li> <li>・あごがつかれた。</li> <li>・つばがいっぱいでした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よくかむように、カミカミ番付表からかみごたえのあるものを選ぶ。</li> <li>・かむことの効用を伝える。</li> <li>・本番と比較できるように、練習でかんだ回数を記録する。</li> </ul>
	<p>6. かんで食べよう③(本番)</p> <p>○フランスパンを食べる。かむ回数を数える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・硬いからさらによくかんだ。</li> <li>・かんだ回数は～回</li> <li>・練習の時よりよくかんだ。</li> <li>・あごがつかれた。</li> <li>・つばがいっぱいでした。</li> </ul> <p>○意識してかむことができたなら、竹内Tからはなまるをいただく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よくかむように、カミカミ番付表からかみごたえのあるものを選ぶ。</li> <li>・かむことの効用を伝える。</li> <li>・本番でかんだ回数を記録する。</li> <li>・練習でかんだ回数と比較する。</li> </ul> <p>・はなまるをいただくことでできたという満足感や達成感を実感できるようにする。</p>
まとめ 5分	<p>7. 感想発表をする。</p> <p>8. 21日の給食メニューを聞く。 ごはん、ししゃも、すきやきふうに、みそしる、ぎゅうにゅう</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習を振り返る。</li> <li>・学習課題と何を意識してよくかむようにしたか確認する。</li> <li>・意識してかむことができたことを称賛する。</li> </ul> <p>・21日の給食メニューを知らせ、よくかんで食べることへ意欲を高める。</p>

### (5) 評価

よくかんで食べることの効用を知り、食べ物をよくかんで食べようとする意欲をもつことができる。(かんでたべよう②③)

## 10 成果と課題

○支援学級在籍児童の実態に応じて、体験活動を多く取り入れた授業展開だった。

○養護教諭との連携が生きた授業内容だった。

△かんで食べよう②と③を練習と本番とに分けるのではなく、給食時間の様子と結び付けて、よくかむことを促すような工夫をしていきたい。

例 「おしゃべりをしないでもう1度よくかんでみよう」

△給食を意識してよくかんで食べるように、取組表を作って実践していきたい。

# スマイル学級道徳科学習授業案

指導者 青嶋 英樹

## 1 題材名 「あらい」 自分の行動をふり返って（正直・誠実）

- 2 題材の目標
- ・「ぼく」の気持ちや行動を考えたり，選択肢から選んだりできる。
  - ・あやまちは素直に認めてあやまることが大切であることがわかり，ロールプレイで練習することができる。

## 3 題材について

本単元のねらいは、「自分の行動をよく振り返って反省し，過ちは素直に改めようとする気持ちを養う」である。教材の内容は友達とのトラブルであるが，本学級の児童には日常生活ですてしまった失敗の経験を思い起こさせることで，お話の内容を身近なこととしてとらえ，次に同じことがあったときにあやまろうとする気持ちを育てたい。

## 4 本校の校内研究とのかかわり

道徳の授業は，教科書の教材文を手がかりに行われ，自分の思いや考えを伝えようとする「話す力」，相手の話を聞き受け止めようとする「聞く力」，自分の気持ちを正確に相手に伝えようとする「書く力」，さまざまな描写をとらえて内容を的確に理解しようとする「読む力」という言語活動の4つの要素が不可欠である。2～3人という少人数で，子どもの実態に合わせた支援を行うことで，この4つの力をより効果的に育てていきたい。

## 5 ユニバーサルデザインに関わって

道徳の授業において最も工夫している点は教材文の提示のしかたである。通常は，教科書をそのまま通読する，あるいは区切って読むことが多い。しかし，あえて教科書の教材文を場面ごとに区切って印刷して用いることで，①課題（発問）の明確化，②興味と期待の持続（最後までお話の結果がわからない），③自分なりに考えること（の楽しさ・自由さ）などの効果を生み出していると考えている。

## 6 本時の学習

(1)日時 平成30年11月1日(木) 3校時

(2)場所 スマイル教室

(3)本時の目標

- ・「ぼく」の気持ちや行動を考えたり，選択肢から選んだりできる。
- ・あやまちは素直に認めてあやまることが大切であることがわかり，ロールプレイで練習することができる

(4)本時の学習活動

授業の流れ		
過程(分)	学習活動と内容	支援・指導上の留意点
導入 (10分)	○本時の教材について知る ・「あらい」という題を板書し，話の内容を予想する。 ○お話(1)を読む ・配られたプリントを自分で読む。 ・プリントを見ながら教師の範読を聞く	・「けんかの話かな」などと想像させることでお話に興味を持たせる。 ・各自に読ませた後で，少しずつ区切って範読し，説明することで内容理解が深まるようにする。



<p>展開 (15分)</p>	<p>○「帰りに待ってろよ」と言われた時の「ぼく」の気持ちや行動を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A おこった「なんだって。先にやったのはそっちだろ」</li> <li>B こまった「やられたら、どうしよう」</li> <li>C あやまった「しかえしして、ごめんね」</li> </ul> <p>○お話の続き(②)を読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・反省してあやまろうと思っはいるが、素直になれない「ぼく」の気持ちを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見が出なければ、板書した選択肢から選んでプリントに記入できるようにする。</li> <li>・顔の絵を使ってプリントや黒板に注目しやすくする。</li> <li>・同じような思いをしたことがあるか問いかけ、「ぼく」に共感がもてるようにする。</li> </ul>
<p>まとめ (20分)</p>	<p>○お話(③)を読み、続きがどうなったのか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A けんかになった</li> <li>B あやまった</li> <li>C なかなかおりした</li> </ul> <p>○お話の続き(④)を読み、「ぼく」は、どうしたらよかったのか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・早くあやまればよかった</li> </ul> <p>○「ぼく」と「コレッティ」に分かれてロールプレイをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・しかえしをして、ごめんなさい</li> <li>・わざとして、ごめんなさい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見が出なければ、板書した選択肢から選んで発表できるようにする</li> <li>・お話の最後がどんなふうにならうか問いかけて考えさせる。</li> <li>・繰り返しあやまろうと思っていたことに着目させ、素直にあやまる勇気が大切であることに気づかせる。</li> <li>・「ごめんなさい」がしっかり言えるように練習する。</li> <li>・顔の絵を使って役割を意識させる。</li> </ul>

(5) 評価

- ・「ぼく」の気持ちや行動を考えたり、選択肢から選んだりできたか。
- ・あやまちは素直に認めてあやまることが大切であることがわかり、ロールプレイで練習することができたか。

7 成果と課題

- 異学年の3人という構成、下学年の教材を使う、教材文を少しずつ提示して続きを考えさせる展開といった複数の手立てで、在籍学級において道徳の授業が成立するようになってきた。
- 友達の意見を聞き、それを参考にしたり真似たりすることで、自分なりの考えを発表したり黒板に書いたりすることができるようになってきた。
- ▲理屈がわかって説明できても、ロールプレイのなかで謝ることは難しく、実際の場面でも自分の非を認めていても上手に謝ることができるようになってはいない。これは今後の課題である。

# 研究テーマ 児童の特性に応じた効果的な指導を目指して

## ～個の課題に応じた支援ツールの活用について～

甲府市立善誘館小学校

ことばと発達のサポートルーム「ゆうき」

### 1 研究のテーマについて

本校通級指導教室は今年度から、言語障害に加えて発達・情緒を含む複数の障害を併せ持つ児童を対象とすることになった。名称も『ことばの教室』から『ことばと発達のサポートルーム「ゆうき」』になり、担当する8校から、新たな課題を持つ児童が通級してきている。

ここに通う児童はそれぞれの特性を持ち、そこから生じる困難さを抱えている。私たち担当者は通級児が学力を身につけたり、人間関係を築いたりする上で基盤となる能力を育成するという大きな役割を担っている。そのために、個々の児童が抱える課題を明らかにし、社会で生きていく上でそれらの課題にどのように向き合っ

ていけばよいのか、どうすれば自分の思いを他人に伝え、より生きやすくてできるだろうか、という視点で指導を組み立ててきた。

そこで、発達・情緒障害の分野の専門的な知識を習得し、前年度の研究で培ったアセスメントスキルを活用して、児童の実態を的確に把握することとした。さらに、個々の児童の課題に応じた支援ツールの開発、活用についての研究を行うこととした。

児童が生きやすい環境を考える時、そこにはインクルーシブの視点が必要となってくる。個別、集団ともに共通する「どんな子供も学習しやすい環境」を考えるための糸口を探りながら研究を進め、児童が見通しを持って学習に取り組み、達成感を感じられるような指導を日々行っていくようにしたい。それが、学習指導要領で掲げられている「生きる力」を育成するという理念にもつながると考えた。

これらを踏まえ、「児童の実態を適切に把握し、個の特性に応じた効果的な指導を展開していく方法について」を今年度の研究の中心に据え、教室研究をおこなっていきたいと考えた。

### 2 児童の課題について

現在、ことばと発達のサポートルーム「ゆうき」に通級している児童が抱える課題は多岐に渡る。それぞれの児童の課題に即した指導が要求されている。

#### (1) 言語障害

- ①構音障害（置換・省略・混同・ひずみなど）
- ②流暢性障害（吃音、速話症など）
- ③言語発達の遅れ

#### (2) 発達障害・情緒障害

- ①自閉症スペクトラム障害（ASD）を含む広汎性発達障害（PDD）
- ②注意欠陥多動性障害（ADHD）
- ③発達性協調運動障害（DCD）
- ④学習障害（LD:読字障害（ディスレクシア）  
書字表出障害（ディスグラフィア）  
算数障害（ディスカリキュリア））
- ⑤選択性緘黙（セレクトィブ ミューティズム）

### 3 ユニバーサルデザインにかかわって

- ・アセスメントツールを活用し、客観的に児童の課題を見つける。
- ・児童の課題に即した、学習ツールの開発をおこなう。
- ・児童の思いを大切にしながら、見通しを持てるような活動を仕組んでいく。
- ・スモールステップで成功体験を増やし、自己肯定感を高める。
- ・児童のがんばりをみとめ、肯定的な声かけをして満足感や達成感をもたせる。

#### 4 研究目標

言語や発達に課題のある児童・幼児の実態を把握し、効果的な指導方法を探る。

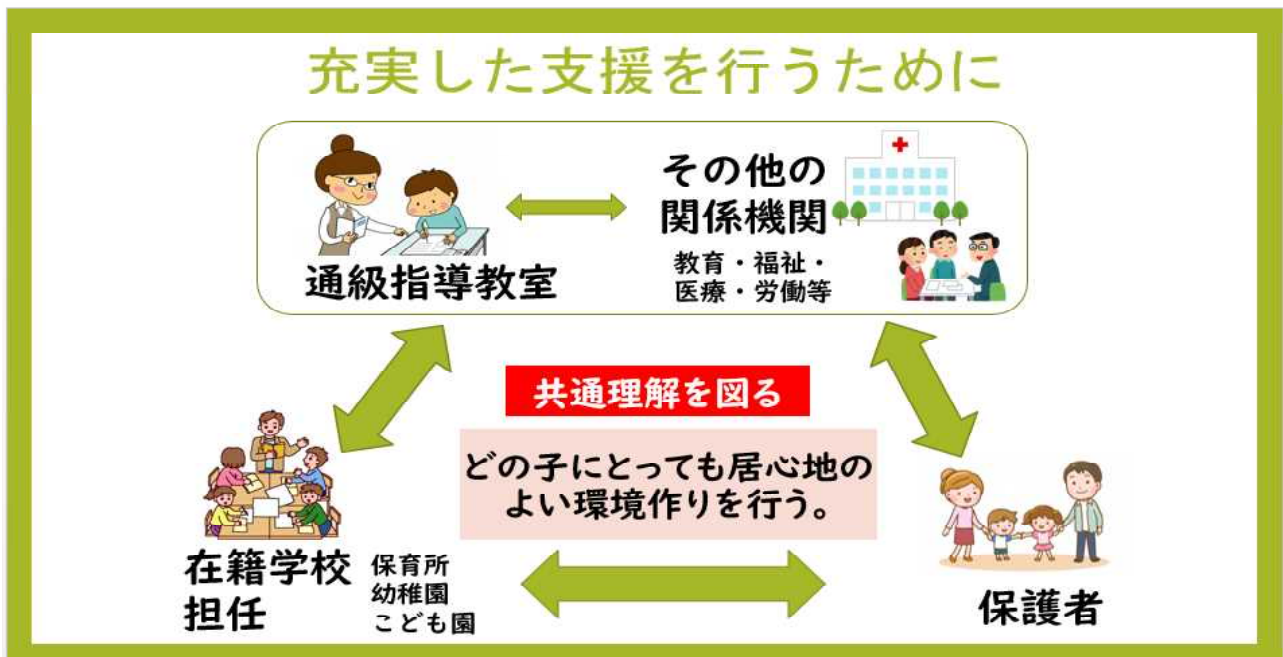
#### 5 研究の方法

- ①言語・発達・情緒障害の児童に対する指導についての理論研究と教材開発
- ②指導実践と評価・改善
- ③関係機関への訪問と情報交換
- ④指導者同士の情報の共有及び共通理解
- ⑤外部研修

#### 6 研究の成果と課題

- 学習支援のための効果的な教材の開発，ソーシャルスキルトレーニングを含む運動療法の導入など，新たな指導方法を実践できた。その結果，通級児の意欲が高まり，指導効果を上げることができた。
- 学校訪問を行い，発達・情緒障害を持つ通級児の学校生活の様子を実際に観察し，担任との情報交換をおこなうことができた。
- 通級児に関わっている医療機関や放課後等デイサービスを訪問し，療育参観，情報交換，連携を行い，通級児にとってより良い支援を検討することができた。
- 積極的に外部研修に参加し，言語障害，発達・情緒障害について専門性を高めることができた。

- 通級児の障害が多様になったため，教材研究や児童理解のためのケース会議をおこなう時間を確保する必要がある。限られた時間の中でどれだけ充実した研修・研究ができるかが課題である。
- 各障害は，まだ明らかになっていない部分が多いので，県内外の研修等に積極的に参加し，専門性を高める必要がある。
- グループ指導をおこなう際に，保護者や在籍学級の都合を考慮した指導時間の調整が難しい。より連携を密にとっていく必要がある。



# 構音障害（口蓋裂幼児）の学習指導案

指導者 新海 和子

## 1 児童の実態

年中・5歳男児

○ 両側性口唇口蓋裂による構音障害

口蓋化構音：[カ・サ・タ・ハ・パ] 行音→[カ] 行音に近いひずみ音

[ガ・ナ・ラ・ザ・ダ・バ] 行音→[ガ] 行音に近いひずみ音

省略：[マ] 行音→子音を省略して母音

※上唇と軟口蓋を自在に動かせないため奥舌に強い癖がつき、口からも鼻からも息が漏れ、周りの人には「コーガンガ（そうなんだ）」「キガガカッカ（しらなかった）」のように、ほとんどの行が[カ・ガ] 行音に聞こえて人に話が通じにくい。年中児ではあるが、早期療育が必要な状態なので平成30年11月に指導開始した。

## 2 本時の学習

(1) 日時 平成30年11月27日（火） 1校時

(2) 場所 ことばと発達のサポートルーム 第5指導室

### (3) 本時の目標

- ・呼気の長さや強さを調節することによって、上唇や軟口蓋の運動性を高める。
- ・今後の子音作りの可能性を探り、指導順序を決める。

### (4) 本時の学習活動

過程	学習活動と内容	指導上の留意点	備考
導入	1 はじめのあいさつとお話	・あいさつや自由会話の様子から、課題音の状態を観察する。	
展開	2 舌とあごの体操をしよう ・「舌先を尖らせて上げ、下げ」 ・「あっかんべー、べー、べー」 ・「舌を平らに出して、あいうえお」 3 息と声を出す工夫をしよう ・「ながーく息を出しましょう」 ・「短く強く、息を出しましょう」 ・「あったかい息を出しましょう」	○前回の復習で、発語器官の運動性を高める。 ○ブローイングで口腔閉鎖と呼気調節をする。 ・ストローでコップの水を泡立てる。 ・ホイッスルを吹く。 ・『ポカンX』をくわえる。飛ばす。 ・hの子音をしっかり意識させる。できるようなら母音も追加する。	卓上鏡 コップ・水 ストロー ホイッスル ポカンX (口唇閉鎖 チップ)
まとめ	4 今日の宿題をたしかめよう	○新しい学習シートを宿題とする。	学習シート

## 3 成果と課題

基礎的な口腔機能を試す2回目の指導で、子音のP(パ行)・B(バ行)・H(ハ行)等の可能性を探り、最も安定してできたH(ハ行)から取り組む方針を立てられた。

ちょうど本児の姓と名がハ行音で始まるので、日常生活での使用頻度が高く改善を実感しやすい。本時で子音Hに母音もつけて「はーへーほー」と正しい単音節を誘導することができた。多動傾向もある年中児だが、練習道具を工夫したり、スモールステップで褒めたりして集中させ、指導効果を上げることができた。

今後の課題は、正しい音をもっと意識付けし、自分の間違った構音に気付かせることである。弁別訓練（聞き分け）を毎回少しづつでも取り入れて行く必要がある。

## 4 学年 言語発達遅滞学習指導案

指導者 後藤 かおり

### 1 児童の実態

母国のタガログ語，英語も不十分なままで基礎となる言語がなく，日本語の理解に支障をきたしていると考えられた。指導半年がたち，サポートルームに笑顔で通級，職員室前で「〇〇です。よろしくおねがいます。」と大きな声で挨拶をし，指導の中では拙い日本語ではあるが，「話したい」「伝えたい」「知りたい」という意欲が見られ，会話の内容に関連して自分が興味のあることについて進んで話す様子も見られた。動詞・助詞の使い方が不十分な面はあるが，コミュニケーション意欲の高まりがみられ，語彙も着実に獲得してきている。

### 2 本時の学習

(1)日 時 平成30年11月 1日(木) 5校時

(2)場 所 ことばと発達のサポートルーム 第5指導室

#### (3)本時の目標

- ・コミュニケーション意欲を高める。
- ・基本的な語句を正しく使い，文を構成して話をするができるようにする。
- ・話題に沿って進んで話をするができる。

#### (4)本時の学習活動

過程	学習活動と活動	指導上の留意点	備考
導 入	1 はじめのあいさつ 2 学習内容を確認する。	・あいさつの様子から意欲や健康状態を見る。	
展 開	3 似ている言葉について知ろう ・「育てる」⇔「育つ」，「切る」⇔「切れる」など似ているけれど意味が変わる言葉について知る。 4 お話をしよう ・「質問絵本」を使い，質問の答えや理由を考えて話す。	・初めての内容なのでヒントカードを使う。 ・「主語」に着目させる。 ・内容にかかわって，本児が話したいことがあれば，それについての会話を続ける。 ・うまく言葉が出てこない時にはフォローする。	ヒントカード むしめがね  絵本
ま と め	5 次時の予告をする。	・次回の学習について知らせる。	

### 3 成果と課題

「声がとても小さく，表情が乏しい」という内容が引継ぎの資料の中に記述されていた。そのため，語彙の獲得以前にどのようにコミュニケーション意欲を高めていくかが重要な課題だった。

日本とは異なる文化や習慣で育ったことを前向きに捉え，日本と自国との共通点や相違点を話したり聞いたりする活動を通じて，次第に自分の言葉で話すことに抵抗を感じるものがなくなり，拙い日本語ながらも一生懸命に伝えようとする姿勢が見られるようになった。毎時間の指導で，児童の実態を見取り，現状よりも少しレベルアップした課題を与えていくことで，それぞれの時間が密度の濃い学習になっていくことができた。

## 5 学年 発達協調性運動障害及び広汎性発達障害学習指導案

指導者 高橋 知香子

### 1 児童の実態

平成 26 年より、伊勢小学校通級指導教室にて指導を受け始める。明るく話をよくするが、生活全般において判断が追いつかなかつたり、自分の思いを言葉でうまく伝えられなかつたりする場面が見られる。また、緊張した際には顔チックや音声チックの症状が出る。眼は、乱視・遠視のため、空間認識が苦手である。動きに正確さはあるが、処理速度は遅い。運動面が苦手で、柔軟性に欠け、体操などは体の緊張が強く出ることがある。

### 2 本時の学習

(1) 日 時 平成 30 年 10 月 29 日 (月) 4 時~4 時 45 分

(2) 場 所 ことばと発達のサポートルーム 第 2 指導室

#### (3) 本時の目標

- ・音読や自由会話の中で、明瞭に話すことができるようにする。
- ・絵本を読み、自分の気持ちを踏まえて感想を相手に伝えられるようにする。
- ・図を模倣することによって、目と手の協調して動かせるようにする。

#### (4) 本時の学習活動

過程	学習活動と活動	指導上の留意点	備考
導 入	1 はじめのあいさつ 2 学習内容を確認する。	・あいさつと自由会話の中から児童の体調や様子を見とる。	
展 開	3 音読 ・口の形を確認しよう ・上手に詩を読んでみよう。	○音読練習をする ・口形を意識しながら、課題の詩を読ませる。	課題の詩
	4 ソーシャルスキルトレーニング ・自分の気持ちを伝えよう。	○ソーシャルスキルトレーニングを行う。 ・絵本『ねえ、どれがいい?』を読みながら、自分の気持ちを考えさせる。	
	5 ビジョントレーニング ・風船をたくさん割ろう。  ・斜めの位置にある点まで目安をつけながら線をひこう。	○風船割ゲームをする。 ・必ず目で追って、指先を意識するよう声掛けする。 ○トレーニングドリルをする ・線をどこからどこまで引くのかを確認し、その途中にあるドットにも目を向けさせる	タブレット PC ワークシート ミニホワイトボード
	6 感覚統合運動 ・手や足がずれないようにおこう。	○感覚統合運動を行う ・無理な動きにならないよう配慮し、必要に応じて、ストレッチやマッサージを行う。	プレイルーム 手形足型シート
ま と め	5 振り返りをする。	・保護者に本日の指導について伝えると同時に、できたことを褒め、強化するようにする。	

### 3 成果と課題

課題を細かく設定することで集中して学習に取り組めた。会話の声が明瞭になってきた、正確に点を線で結べることが増えたなど学習の効果が出てきている。課題を多く持つ児童なので、複数の課題を如何に関連付けるかを今後も検討していく必要がある。

# 1 学年 構音障害学習指導案

指導者 有賀 登希子

## 1 児童の実態

○構音障害

置換： [ケ・ゲ] 音→ [テ・デ] 音  
 [サ・ザ] 行音→ [タ・ダ] 行音  
 [シ] 音→ [チ] 音, [ツ] 音→ [チュ] 音  
 [シャ・ジャ] 行音→ [キャ・ギャ] 行音  
 [チャ] 行音→ [キヤ] 行音  
 [リャ] 行音→ [ヤ] 行音  
 単語により [キ・ギ] 音→ [チ・ジ] 音  
 その他不規則な置換, 省略がある。

混同： [ラ] 行音と [ダ] 行音, [ハ] 行音と母音を混同する。

\* [ラ] 行音と [ダ] 行音の混同以外の課題音は, ほぼ改善されてきている。

## 2 本時の学習

(1)日時 平成30年11月 2日(金) 5校時

(2)場所 ことばと発達のサポートルーム 第2指導室

### (3)本時の目標

- ・上手になった音を使いこなせるようにしていく。
- ・ラ行音とダ行音の発音の仕方の違いを知り, 練習する。

### (4)本時の学習活動

過程	学習活動と活動	指導上の留意点	備考
導入	1 あいさつ 2 今日の学習内容を確認する。	・自由に会話をしながら, 課題となっている音の現状を把握する。 ・1時間の流れを確認する。	練習プリント
展開	3 舌と口唇のトレーニング ・舌のストレッチ・挙上 4 音の練習 ①上手になった音を確認・練習 「上手になった音が入った文章を読んでみよう。」 ②課題音の練習 「ラ行音とダ行音の違いを確認しよう。」 「ラ行音とダ行音を区別していえるように練習しよう。」	・舌の動きの確認 (舌先の使い方の様子) ・上手になった音を使って, さらに長い文章や会話表現での様子を見る。 ・舌の挙上をしっかりと行うよう気をつけさせる。(鏡を見ながら) ・模型に色の違うシールを貼って, 舌先をつける位置の違いを知らせる。 ・ラ行音とダ行音をランダムに指し, 区別して発音できるようにしていく。	鏡写真 短文プリント 顎模型 弁別シート
まとめ	5 振り返りをする。 6 宿題の確認をする。	・プリントの学習内容を確認しながら振り返りをする ・今日の学習の中でできるようになったところを宿題にする。	練習プリント 学習ファイル

## 3 成果と課題

ラ行音とダ行音は, 共に舌先を一度上顎につけて発音するが, ラ行音の舌の使い方を模型とシールを使って視覚的に分かりやすく示し, 練習をスムーズに進められた。その他の課題だった音は, 文章の中に出てきても正しく発音出来るようになった。

## 【平成30年度善誘館小学校の校内研究に関するアンケート】 結果と考察

研究部

お忙しい折、アンケートに御協力いただきありがとうございました。アンケート結果をまとめ、課題となる部分には考察を付しました。校内研で検討いただき、来年度の校内研の方向性としてしたいと思います。活発なご意見をお願いいたします。

(凡例) ○肯定的回答 ▲課題 □改善に向けた意見 \*考察

### 【設問①】

◎本年度の研究テーマ『学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成』，サブテーマ『主体性を育む言語活動の充実と家庭学習の工夫を通して』は，適切であったか。

4 適切	3 概ね適切	2 やや不適切	1 不適切
70%	30%	0%	0%

○確かな学力の育成は，学校教育に求められている大きな課題であり，そのことを職員全員で研究する意義は大きい。児童の実態に応じて，言語活動と家庭学習の充実に絞った取り組みは適切であった。

○研究テーマ・サブテーマとも，昨年度の研究を土台にしたより深まりが増したものになってよかった。

○本校児童の実態や昨年度の研究の反省に基づいた研究テーマなので，適切であったと思う。

▲特別支援学級担任として，学びの基礎・基本とは

確かな学力とは，

主体性を育む言語活動とは，

家庭学習の工夫とは，

などについて具体的に考える必要があった。

\*研究テーマについては，来年度の方向性の検討と合わせて討議をお願いします。

### 【設問②】

◎本年度の研究の進め方は，適切であったか。

4 適切	3 概ね適切	2 やや不適切	1 不適切
70%	30%	0%	0%

○理論研究を基に，助言者を招いた授業研究やQ U等の実態調査を実施することにより，研究主題と副題に迫る方法は，学校現場には適した研究の進め方である。

○2ブロックの研究体制でよかった。

○計画的に進められていた。

□指導主事の話にあったやまなしスタンダード算数編，理科編については，夏休み中には押さえておきたい内容だった。事前に研修できれば，研究対象の授業実践に生かすことができると思う。



\* 早めに研究授業の教科が決定している場合は、夏季休業中の研修会で学習する機会を設定してもよいかと思えます。

【設問③】

◎本年度の研究組織および研究計画（日程）は、適切であったか。

4 適切	3 概ね適切	2 やや不適切	1 不適切
80%	10%	10%	0%

○研究授業の検討を中心に、家庭学習についての情報交換や外国語活動、サポートの取り組みなどを取り入れる実効性のある研究計画であった。

○無理のない日程でよかった。

▲講師の先生方の都合もあるので仕方がない面もあるが、研究授業では、より多くの先生方が参加できるような日程になるとよかった。

□研究組織については、特別支援学級担任は特別支援教育関係ということで、サポートルームブロックに所属した方がよいのだろうか・・・

□研究計画に沿って、授業研究会には全員参加がよいと思う。

\* ことばの教室がサポートルームになったという点もあり、研究組織もこれまでと同じようにするのではなく、再編が必要ではないかという意見もあります。サポートルームの先生方と共に検討する必要があります。

【設問④】

◎あなたが所属する研究ブロック（奇数学年ブロック・偶数学年ブロック）の成果と課題についてできるだけ具体的に書いてください。

○辺や頂点の数に着目して、個人・ペア・全体と集団を広げていく中で、示された図形を仲間分けしていく授業の流れは、児童の図形を捉える力を向上させることにつながった。

▲児童からは、想定より多い仲間分けが出てきたが、仲間分けやその理由などについての全体での話し合いを活性化させる手立てをより検討しておくべきであった。具体的には、仲間分けを黒板に示しておくこと、1人の児童の意見を問い直すこと、誰もが納得できる分け方の視点を持たせることなどである。

○理科の授業について検討する機会がこれまであまりなかったため、単元の流れや1時間の授業の流れについて勉強になった。

○3年生の理科の授業について、教材研究の方法や授業の組み立てについて学ぶことができた。

▲ブロックでの検討を重ねてきたが、授業研究会で指摘を受けたことについては、勉強不足を感じた。

○回数的にも時間的にも少ないブロック研究であったが、授業者が選んだ単元や授業の内容について部会員一人一人が自分のこととして考え、意見を交わすことができた。そして、授業者がそこで出された意見を参考にしながら、最終的には自分なりの考えで指導案を作り上げることができたことは大きな成果だといえる。授業後の研究会では、課題といえる指摘も数多く出されたが、授業技術という面では、初任者である授業者本人には、今後、教材研究をしたり、授

の組み立てを考えたりしていく上でよい勉強の機会になったのではないかと考えられる。

○授業研究を中心に、研究テーマに向けた実践的な研究ができてよかった。（同一意見多数）

○ブロックとして共通認識を持って研究授業ができたと思う。

○言語活動の充実については、ブロック内で共通理解をもって取り組むことができた。

○研究授業の指導案検討では、研究テーマや児童の実態をもとに授業展開や発問について、綿密な計画を立てることができた。また、本校の指導案の書式についても丁寧に指導していただき、とてもありがたかったです。

○学習プリントを作成する際に、スマイル学級在籍 TK さんへの配慮について授業者と支援学級担任とで打ち合わせをすることができた。

○交流及び共同学習として、スマイル学級在籍の TK さんが樋口先生（支援員）の支援を受けながら学習している様子を校内の先生方に見ていただくことができた。

○校内支援委員会において、3年0Mさんは何らかの支援が必要な児童として名前が挙がっている。理科の授業を観察することで、学習の様子を校内の先生方に見ていただくことができた。

▲外国語活動の準備をしたが、特にブロックにわけて作業する必要はなかったかなとも感じた。

**\* 今年度は若手の二人の先生方に研究授業を提供していただいたおかげで、全員が各ブロックで授業研究を通して多くの学びを得ることができました。ありがとうございました。来年度も教材研究から全員で学ぶ姿勢を大切に、授業研究は各ブロック単位で2本実施することを確認できればと思います。**

#### 【設問⑤】

◎一人一実践としてあなた自身が行った校内研究に関わる授業について、成果（子供たちの変化の様子等）や課題をできるだけ具体的に書いてください。

##### ①「言語活動の充実」に向けた取組を通して

○授業に言語活動を取り入れる意識をしていく中で、子供たちが自分の考えを自分なりに表現することができるようになっていった。

○算数では、考え方を説明することに重点を置いた。自分の考えを書く→交流する（ペア・グループ）→発表するという流れで行ってきた。

▲説明する力は徐々についてきたと感じるが、発表することについては、まだまだ不十分でだと感じる。

○元から身についていたのだと思うが、ペアでの意見交換の際に互いの顔を見て相手の考えが書かれたものを見たり読んだりするのではなく、しっかり自分の言葉で伝えることができていた。

○「型」があることで、自分の考えのどの部分に主張を書き、根拠をどのように書けば良いのか迷わずに書けるようになってきた。

▲予想を反映した考察の書き方がまだ身についていない児童が多い。また実験結果から何がわかるのかという視点を持たすことができなかった。

##### ②「ユニバーサルデザイン」を活用した指導の工夫を通して

○実物投影機の活用により、やり方を説明する

○自分の考えをみんなの前で発表することが苦手な児童もいるので、朝の「お話タイム」を設けたり、実物投影機を用いたりしながら、発表することに慣れさせていくようにしている。

### ③個に応じた指導の工夫を通して

○学級には、自分や人の気持ちを考えたり表現したりすることが苦手な子どもが在籍しており、担任としては、交流学級ではもちろんのこと、在籍学級でも道徳の授業にはこれまで二の足を踏むことが多かった。そのため、異学年の2人または3人という構成、下学年の教材を使う、教材文を少しずつ提示して続きを考えさせる展開といった複数の手立てを工夫をすることで、在籍学級において道徳の授業が成立するようになってきた。さらに、友達の見聞き、それを参考にしたり真似たりすることで、黒板に自分なりの考えを書くこともできるようになってきた。これらは大きな成果であるといえる。しかし、理屈がわかって説明できても、ロールプレイのなかで謝ることは難しく、実際の場面でも自分の非を認めていても上手に謝ることができるようになってはいない。これは今後の課題である。

### ④家庭学習の工夫に向けた取組を通して

○家庭学習の取り組みでは、内容についてみんなで考えたり、掲示や学年だより等で紹介したりするなかで、一人一人が自分なりに考えて取り組むことができるようになった。

○家庭学習の取り組みでは、児童間でノートを見せ合ったり、内容について振り返ったりする機会を設けてきた。家庭学習を毎日することは習慣化されているが、自分にとって必要となる学習ができるようにさせていきたい。

□児童の実態や家庭の状況に困難さがあるので、家庭学習の内容や量の工夫が必須である。

### ⑤その他

○図工授業や書写授業の中で、「その時間ごとのめあてや流れ、まとめとしてねらう具体像」などを板書するようにした。

○（その結果）多少、学習活動の中で目指す「もの」（字・絵・具体物）のイメージ化が図られたかな？と思う。

○算数では、自分の考えを絵や図を使って表す方法を紹介したり、算数ノートの使い方を工夫させたりするなかで、一人一人の児童が自分なりに既習の学習を生かして問題を解決しようと取り組むことができた。

○自力解決の時間を確保したり、机間巡視を丁寧に行ったりしたことで、児童一人一人が自分の考えを持てるようになった。また、児童が友だちの意見と関連付け発言や考えの共有ができるようになった。

○児童の生活実態に合った学習課題を設定し、体験活動を多く取り入れた授業を行うことができた。毎日の生活の中で授業内容を想起させ、健康な生活について意識することができている。▲児童の多様な考えを収束させて、まとめにつなげる活動が不十分なことがある。

\*「根拠のある意見」を書くことについては、学力状況調査においても本校の課題として指摘されています。（目的に応じて、引用して意見を書く。）また、国語をはじめその他の授業においても、「原因と結果の関係」や「主述に即した文章構成」への理解に課題が見られます。国語科だけではなく、日常の授業および生活指導から論理的思考力を育むための教師のかかわり方や取組について、共通理解のもと研究していく必要があると考えます。

\*家庭学習については、これまで継続して研究してきた成果が表れてきているようです。引き続き、家庭への呼び掛け、内容の工夫や継続的な取り組みは必要ですが、全体研究の一つとして取り組んでいくかどうか、ご意見をいただきたいと思います。

【設問⑥】

◎本年度の校内研究の成果と課題について、御意見をお書きください。

①授業研究を通して

○研究授業に来ていただいた指導主事の先生のお話と資料は大変ためになり参考になるものだった。そう感じる事ができたのは、私たちが真面目に授業づくりや授業観察、そしてその後の研究会に取り組んだからである。それは、2人の授業者からの授業提供があったからであり、そのおかげで校内研に参加した誰もが学ぶ機会を得ることができたのだと思う。その意味で授業者の2人と今年度の研究の中心となった研究主任に感謝したい。

○理科の学習における「型」の指導は効果的であるということがわかった。継続して指導をしていきたい。

○研究授業や授業案検討、講師を招いた研修、家庭学習の話し合いを通して、授業づくりの方法や家庭学習の定着につながる解決策を考えることができた。

②「言語活動の充実」「家庭学習の工夫」に向けた取組を通して

○確かな学力を育成するには、児童の言語力を向上させることが大切であること、また継続的な家庭学習や優れた学級集団が重要な要素であることを確認できた。

▲教師の役割である児童の意見（考え）を上手につないでいく方法（コーディネート）について、授業研究を通して学び、力量をつけていくべきである。書くことと発表することの関連性、つまり、児童が書くことにより考えを整理し、それを発表につなげ、発表を聞いて考えを振り返り、そのことを書いて整理していく循環を作ることである。

○言語活動を意識した取り組みが全校体制でなされていてよかった。

○継続して言語活動について取り組んできたことで、各教科の中で意識しながら授業づくりを行うことができた。

○言語活動の充実について、継続した取り組みを行ってきたことで、日常生活やいろいろな教科の中で、言語活動を意識することができた。

▲限られた時間の中で、いかに言語活動を仕組んでいくかもう一度考え直す必要性を感じた。言語活動と一言で表しても、「書くこと・話すこと・聴くこと・議論すること」と様々なものを指すと思う。頭ではわかっていたつもりであったが、学習課題や実態に応じて今まで以上に適切に使い分けをしていかなければならないと感じた。

○全職員で言語活動を意識した取り組みや家庭学習の工夫がなされていてよかった。

③研究組織として

○研究テーマに基づいて2つのブロックから授業を行い、授業研究会を行うことができた。

○外国語活動の資料作りの時間も取っていただいたことで、来年度の実施に向けての準備にもつながった。

○少ない研究同人ではあるが、その中で、各自がそれぞれの立場から課題意識をもって、積極的に研究にあたり、成果や課題について共通理解し、学び合うことができた。

○校内研究の場だけでなく、日頃からお互いに協働し、学び合う雰囲気の中で「OJT」が進められていた。

■「子供たちの学びを支える学級集団作り」＝すべての基盤

できれば、研究対象授業についての事前研修をお願いしたい。(理由は設問②の2つ目の記述)

研究組織の見直しが必要か・・・

④その他、全体を通して

○UDを取り入れた授業実践や教室環境についての研修、サポートルームの実践報告、外国語教育 県外視察の還流報告、外国語教育の実践研修、英語のピクチャーカードづくり、自主学習ノートの回覧なども行うことができた。

○年間では限られた回数 of 校内研ではあるが、外国語活動の研修も非常に楽しく有意義であった。

\*「自学ノートを見合う機会」については、どのような形式で実施したらよいか、ご意見をお聞かせください。できるだけ上の学年のものを下の学年が見て参考にできればと思いますが。

\*言語活動について研究してきましたが、子供の活動だけではなく、教師の授業力の向上に焦点化した研究の必要性について御意見をいただきました。来年度の研究テーマの方向を示す貴重な意見だと思います。

【設問⑦】

◎来年度の校内研究の方向性について(テーマ、対象教科などの要望も含めて)御意見を記述してください。

①継続研究が良いという意見

- ・基本的には、本年度の継続研究が良いと思う。教科は、特に限定する必要はないと思う。
- ・今年度の研究をさらに深めていくテーマでよいと思う。
- ・同じテーマ・サブテーマでの継続研究

②研究テーマを変更した方が良いという意見

・『学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成』は不易の課題であると思う。本校としてはこれを身に付けるために言語活動の充実と家庭学習の取り組みの二本柱で研究を進めてきたが、後者に関しては県全体で取り組むことになったことと、情報交換の中で定着してきている様子 があるが、テーマとしての明記はなくしても良いと感じる(児童に取り組むことへの声かけは継続してくが)。ここで『確かな学力の育成』につながる新たな研究を進めていくことも必要であるように思う。

道徳について研究したい

- ・道徳が教科として位置づけられたので、どのような授業をしていったらよいか迷うことがしばしばあった。評価についてももう少し、勉強したい。
- ・道徳の授業の進め方や評価について

外国語活動について研究したい

- ・教科や領域を絞って研究するのはどうでしょうか。たとえば、外国語活動は単発の研修会ではなく、校内研として授業研究を通して全員で学ぶことができればと思います。
- ・外国語の実践について

今日的な課題について研究したい

- ・今日的な課題についての研究の必要性を感じる(道徳の評価・外国語活動・プログラミング教

育・ICT機器の活用・・・)。

・確かな学力の育成，家庭学習の定着は今後も継続していきたい(学年の実態から)。しかし，新学習指導要領の実施に向けた道徳や英語の授業づくりの仕方やプログラミング教育についても学ぶ機会が必要であると考えます。

\* 現状の研究を継続していく意見と，新たな教育課題への対応を研究していきたいという意見が多数あります。

\* 研究部としては，(1)ここ数年継続している研究主題から変更すべきなのか，(2)研究主題は継続し，副主題を変更して今日的な課題に対応させるのか，それぞれについての先生方の御意見をお聞かせいただきたいと思ひます。(ブロックで討議してください)

\* 昨年度の反省でも同様の意見が出ておりましたので，参考までに記します。

～昨年度の考察より～

\* 道徳教育に関しては 4 月より全面実施となりますので，道徳教育推進教師を中心とした提案のもと，O JTの形で進めたほうが現実的です。

\* 外国語活動に関しては，推進リーダーを中心に先行研究・市教委の指示・教育課程の部会の作業等を見極めたうえで，全面実施に向けた準備を整えていくことが必要だと思ひます。それと並行して学習会という形式で，クラスルームイングリッシュやFETとの模擬授業等を設定してはどうでしょうか。

\* プログラミング教育については，32年度全面実施に向けて，まず内容ありきではなく，その目的について十分に理解する必要があると思ひます。そこで，来年度は情報教育担当にさまざまな情報を提供していただき，教員一人ひとりが校内・校外問わず研修の機会を得ることを第一に考えてはどうでしょうか。

以上，検討をお願いします。

## あ と が き

本校では、今年度の研究主題を「学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成」という形でサブテーマを「主体性を育む言語活動の充実と家庭学習の工夫を通して」とし、研究内容を「ユニバーサルデザインを取り入れた授業」としました。

更に本校においても喫緊の課題である学力の向上にも視野を広げ、家庭との連携を図りながら学習内容のより確かな定着を探るべく、「家庭での学習習慣の定着のための手立てを探り定着させること」も研究の柱として取り上げました。今までの研究で確認した思考力、判断力、表現力等を育むための学習活動や言語活動の場面・環境設定等を授業実践に結びつけていく中で、これらの能力を育むための指導法の工夫改善と日常的な活動の工夫に取り組んできました。

家庭学習については、昨年度より、どのような方法で行うのがいいのかということについてPTA総会などの折、家庭の協力を得るために、研究主任からの情報提供と説明を行い、全校で統一して学校側と家庭が協力して学力向上について取り組む体制づくりが行われました。その取り組みが進むにつれて、学習の中身についての問い合わせも多くなり、と同時に保護者の家庭学習に対する関心もより高くなっていきました。また、学校での提案と並行して、「東中学校区連携推進の取り組み」の柱の一つである「家庭学習の定着・推進」のための「自学ノートの交流」にも取り組み、更によりよい家庭学習の在り方を探ることになりました。

また、昨年度に引き続き、今日的な課題の一つである、通常学級における困り感を持つ児童への対応について、夏季校内研究会の際に、本校のことばと発達のサポートルーム「ゆうき」の教諭を講師として、特別支援教育やユニバーサルデザインの観点からの学級経営から支援の方策、実際の指導方法や教材教具に至るまで幅広く、共に学び合い、サポートルームとの連携も一層深めることができました。

一昨年度からの研究実践により、「書く活動を有効に取り入れた活動」や「各教科における言語活動」の授業の中での工夫・改善は一定の成果を上げることができ、各自が次への一歩を踏み出し、更に成長することができた研究であったと思われまます。

次年度は、今年度研究で明らかになった課題の解決をめざし、新学習指導要領の移行から全面実施期間としての取り組みも行いながら、社会に開かれた教育課程、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学びなど、今日的な課題への取り組みも行っていきたいと考えています。

最後になりましたが、今年度の研究に御指導・御助言をいただきました山梨県総合教育センターの飯沼 久裕先生、河西 絵美先生、甲府市教育委員会の高橋 義美先生、そして、本校の教育活動を温かく見守り支えてくださっている保護者・地域の皆様方に深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

平成31年3月

教頭 望月 正紀

指導助言者	飯沼 久裕先生 (山梨県総合教育センター 指導主事)		
	河西 絵美先生 (山梨県総合教育センター 指導主事)		
	高橋 義美先生 (甲府市教育委員会 学力向上専門員)		
研究同人			
校長	柏木 精一	やまみ学級	今村さつき
教頭	望月 正紀	☆スマイル学級	青嶋 英樹
教務主任	坂本 暢	サポートルーム「ゆうき」	新海 和子
1年担任	大勝まゆみ	サポートルーム「ゆうき」	後藤かおり
2年担任	堀田 真吾	サポートルーム「ゆうき」	高橋知香子
3年担任	村上 聡	サポートルーム「ゆうき」	有賀登希子
◎4年担任	城内 優子	養護教諭	竹内かおり
☆5年担任	神宮司香織	特別支援教育支援員	樋口 菜穂
6年担任	深沢 俊哉	事務主査	三枝 淑江
非常勤講師	宮川美恵子	◎研究主任	☆部会長

